

四十八人目

森田草平

青空文庫

もうりこへいだ　こあきゆうど
 毛利小平太は小商人に身を扮して、本所二つ目は相生町
 三丁目、ちようど　きらさひようえやしき
 吉良左兵衛邸の辻版小屋筋違い前にあたる米
 屋五兵衛こと、じつは同志の一人前原伊助の店のために、今日
 しも砂村方面へ卵の買い出しに出かけたが、その帰途に、亀
 井戸天神の境内けいだいにある掛茶屋に立ち寄って、ちよつと足を休め
 た。葭簣よしずの蔭かげからぼんやり早稲わせの穂の垂れた田圃たんぼづらを眺ながめてい
 ると、二十はたちばかりの女中がそばへやってきて、

「お茶召しあがりませ」と言いながら、名物葛餅くずもちの皿と茶盆ちやぼん

とを縁台の端に置いて行つた。

小平太は片手に湯呑を取り上げたまま、どこやらその女の顔に見覚えがあるような気がして、後を見送つた。女の方でもそんな気がするかして、二人の子供を連れ先客の用を聞きながらも、時々こちらを偷み見るようにした。小平太は「はてな？」と小首を傾げた。が、どうしても想いだせぬので、二度目にその女が急須を持ってそばへ来た時、

「姐さん、わしはどつかでお前さんを見たように思うが——」と切りだしてみた。

「はい」と、女は極りの悪そうに顔を赧らめながら、丁寧に小腰を屈めた。「わたくしも最前からそう思い思いあんまりお姿が

変つていらつしやいますので……もしやあなたさまは元鉄砲洲
のお屋敷においでになった、毛利様ではございませぬか」

「して、お前さんは？」

小平太はぎよつとして聞き返した。

「わたくしは同じお長屋に住んでおりました井上源兵衛の娘でござ
います」

「ほう、井上殿のお娘御！　そういうば、さつきから見たように
思つたのもむりはない」と、小平太はあたりを見廻しながら低
声につづけた。井上源兵衛といえは、九両三人扶持を頂いて、
小身ながらも、君候在世の砌りはお勝手元勘定方を勤めていた
老人である。「それにしても変つた所でお目にかかりましたな。

で、お父上はその後御息災でいられるかな」

「はい」と言つたまま、娘はきゆうに下を向いて、はらはらと涙を滾こぼした。

「ふうむ？」と、小平太は相手の容子を見い見い訊ねてみた。

「では、何か変つたことでもござりましたか」

「は、はい」と、娘は前垂の端はしで眼の縁めぐを拭つて、ちらと背後うしろを

振返りながら、これもあたりへ気を兼ねるように小声でつぶけた。

「父は昨年の暮なに亡なくなりました。それから引続いて母が永い間わづらの煩わづらいに、蓄えとでもござりませねば、親子揃そろつて一時は路頭に

迷おうとしましたが、長屋の衆が親切におつしやつてくださいますして、この春からここで勤めさせていただくようになったのでご

ございます」

「それはそれは、とんだ苦勞をなされましたな」と、小平太も相手をいたわるように言った。「だが、これも時代時節ときよじせつというものの、そのうちにはまたいいことも運めぐつてきましょう。あまりきなきなきな思つて、あなたまで煩わぬようにされるがようござりましょうぞ」

「ありがとうございます」と、娘は優しく言われるにつけて、またもやせぐりくる涙を前垂の端で押え押えました。

「で、母御ははごはその後ちつとはおよろしい方でござるかな」

「それがどうもはかばか挨拶々しくございませんで……この夏から始終寝たり起きたりしていましたが、秋口からはどつと床についたきりでございますの」

「それはまた御心配な」と、小平太は心から同情するように言った。「まあ、せいぜい大切だいじにしてあげなさるがいい。手前もまた何かのおりにお訪ねすることもござろうが、ただ今のお住家すまいはこの御近所です？」

「はい、妙見みょうけんさま様の裏手の七軒長屋で、こちらの茶店へ出てくるおしおと聞いていただけば、じき知れますの」と言いかけて、ふと気がついたように、「でも、大変汚むさい所でございますので、あなた方にいらしていただくような……」と、遠慮がちに言いなおした。

「いやなに、今では手前もごらんのとおりの身の上、その御遠慮にはおよびませぬわい」と、小平太はちよつと袖のあたりを振返

りながら、わざとらしく笑ってみせた。こんな風に身を落してこそおれ、今に見よ、同志揃って吉良邸に乗りこみさえすれば、主君の仇を討った忠義の士として、世に謳うたわれる身だというようない意識がちらと頭の中を翳かすめたのである。

「それに」と、彼はまた何気なくつぶけた。「あのへんは手前もちよくちよく参りますから、また通りがかりに寄せていただくこともございましょう。どうかお帰りになったら、小平太がよろしく申したと、母御にお伝えくださるわい」

まだ何やら訊いてみたいような気もしたが、人目を惹ひくのがいやさに、小平太は茶代を払って、そこそこに茶店を出てしまった。年が若いだけに、思わぬ邂めぐりあい逅あから妙に心をそそられたところ

へ、女の涙に濡れた顔を見て、大事を抱えた身とは知りながら、
 ついそれを忘れるような気持にもなつたものらしい。夕日を仰い
 で、田圃たんぼの中の一筋道を辿りながらも、彼は幾度か後を振返ろう
 として、そのたびにようよおうの思いで喰いとめた。

二

去年三月主君あさのたくみのかみ浅野内匠頭、殿中でんちゆうにて高家の筆頭きらくこうずけ吉良上
 野介のすけを刃傷にんじゆうに及ばれ、即日芝の田村邸において御切腹、同
 時に鉄砲洲の邸はお召し上げとなるまで、毛利小平太は二十石五
 人扶持ぶちを頂戴ちやうだいして、これも同志の一人大石瀬左衛門の下に大

おなんどがかり

納戸係を勤めていた。当時年は瀬左衛門より一つ上の二十六歳であつた。その後赤穂城中における評議が籠城、殉死から一転して、異議なく開城、そのじつ仇討ときまつた際は、彼はまだ江戸に居残つていたので、最初の連判状には名を列しなかつた。が、その年の暮に大石内蔵助が、かねて城明渡しの際恩顧を蒙つた幕府の目附方へ御礼かたがた、お家の再興を嘆願するために、番頭奥野将監と手を携えて出府した際、小平太は何物かに後から押されるような気がして、内蔵助の旅館を訪ね、誓書を入れて義徒の連盟に加わつた。何物かとはいわゆる時代の精神である。当時の侍は、君父の仇をそのままに差措いては、生きて人交りができなかつた。彼もその精神に押しだされたので

ある。そして、内蔵助の帰洛きらくに随行ずいこうして、上方かみがたへ上つて、しばらく京阪の間に足をとどめていた。

時代の精神と、もう一つは、世が太平になつたために、ひとたび主しゆうに放れた浪人は喰うことができない、何人だれも抱え手がないという事実じじつに圧迫あつぱくされて、小平太のほかにも、誓書ちかじを頭領かぶらにいたして、新あらたに義盟ぎめいにつくもの前後踵くびすを接した。いかに喰えない浪人生なみのせい活いよりも、時代の精神せいしんに追われて死しにつく方が、彼らにとつて快こころよく思われたかは、主家の兇きよう変へんの前に、すでに浪人なみのせいしていた不ふ破わ数かず右衛門えもん、千葉三郎兵衛ちねぼ、間新六はざましんろくの徒とが、同じように連盟れんめいに加わつてきたのでも分る。とにかく、元禄十四年の暮から明くる年の春にかけて、連判状れんぱんじょうにその名を列つらねるものじつに百二十五

名の多きに上った。しかも、その中には、内匠頭の舎弟しやてい大学を
守りもたてて、ならぬまでもお家の再興を計った上、その成否を見
定めてから事を挙げようとするものと、そんな宛にもならぬこと
を当にして、便々と待つてはいられない、その間に敵かたきと覬ねらう上野
介の身に異変でもあつたらどうするかと、一途ずに仇討の決行を主
張するものがあつて、硬軟両派に分れていた。前者の音頭おんどを取
るものは、さきに大石と同行した奥野将監を始めとして、小山、
進藤の徒であり、後者は堀部安兵衛、奥田孫太夫などの在府の士、
並びに関西では原総右衛門、大高源吾、武林唯七らの人々であつ
た。その争いが烈しくなるにつれて、前者は後者を罵ののつて、あい
つらがそんなに逸やるの喰うに困るからだと言った。そして、そ

れは事実でもあつた。元禄十五年の正月二十六日に、堀部安兵衛、奥田孫太夫、高田郡兵衛三人の連名で、江戸から大石に宛てた書面に、上方の連中がゆつくりしていられるのは、敵の様子を目の前に見ていないからだ、それを毎日見せつけられている吾々の胸中も察してもらいたいというような意味のことを述べた末に、

「同志の中でも器用なものは、医者まねの真似まねをしたり鍼はりい医いになつたりして、それぞれ渡世の道を立てているが、吾々は仇討専門で、ほかに芸がないから日々喰い詰める一方である。願わくば、あまり見苦しきてい体ていになり下さがらぬうちに、一日も早く決行したい」といったような一節がある。これは浪士の実情をありていに道破したものといわなければならぬ。

ところで、内蔵助自身は、どちらかといえば前者に属していた。彼は仇討連盟の盟主になった。しかも、その裏面においては、全然それと反^{はんこう}向するような主家の再興に力を尽していた。あるいは主家の再興は再興、仇討は仇討で遣る気であつたと言うかもしれない。しかし主家を再興した後で、仇討のできないことは、何^だれよりも内蔵助自身一番よく知っていた。仇討をしなければ、同志^{あざむ}を欺いたことになるばかりでなく、永く世の指弾^{しだん}を受けるかもしれない。しかも、一国の重^{じゅうき}寄に任ずる城代家老としては、主家の恨みを晴らすということも大切であろうが、それよりもまず主家の祭祀^{さいし}の絶えざることを念とするのが当然だと信じたのである。この信念^{もと}の下に、彼は去年の暮に出府した際も、あらゆる手蔓^{てづる}を

求めて目附衆めつけしゆうへ運動もしたし、それから後も山科に閑居して、茶屋酒にうつつを脱かしていると見せながら、暮夜ぼやひそかに大垣の城下に戸田侯（内匠頭のじゆうてい従弟とだうねめのしやうじきだ戸田采女正氏定）老職の門を叩いて、大学擁立ようりつのことを依頼いしよくした事実もある。もつとも、そうした運動の奏効そうこうおぼつかないことは、彼といえどもよく承知していた。が、全然徒勞に終るものとも思っていなかった。再興の望みが絶対になかったように思うのは、事後においてそれを見るからで、当時にあつては、四囲しいの情勢から見て、かならずしもその望みがなかったとは言われない。幕府がいったん取潰した家を再興した先例はいくらかもある。ましてや、相手の吉良家に何のお咎めがなかった点から見ても、その渦中にあつた浅野家の

浪人どもには、今にも再興の恩命が下るように思われたかもしれない。

とにかく、内蔵助からしてそういう気持であつたために、正月の山科やましな会議では、持重派じちようはが勝ちを制して、今年三月亡君の一周忌を待つて事を挙げようといふかねての誓約も当分見合せとなつた。そして、二月の初めには、一党の軍師といわれる吉田忠左衛門が、内蔵助の命を含んで、関東の急進派ちんぷ鎮撫のために江戸へ下ることになつた。彼が浪士どもに分配するために、軍用金の中から若干そくばくの金を携たずさえて行つたことはいふまでもない。

江戸の急進派の中でも一番あせつていた堀部安兵衛は、それからも絶えず書を寄せて一挙の即行を迫つていたが、とにかくに煮え

きらぬ内蔵助の態度をもどかしがつて、六月の末には单身東海道を押上つてきた。そして、山科の大石の許へも立ち寄らず、大阪の原総右衛門、京の大高源吾など上方の急進派を糾合して、大石の一派とは別に、自分たちだけで大事を執行しようと計つた。ここに赤穂義士の連盟も分裂の危機に瀕したのである。が、幸か不幸か、七月の二十二日になつて、江戸の吉田忠左衛門から浅野大学が芸州広島へ流謫を命ぜられたことを報じてきた。同じく二十五日には、奥田孫太夫からも同様の書面がとどいた。こうなればもう是非がない、主家再興の望みは永久に絶えたのである。で、内蔵助もついに意を決して、七月二十八日、京、伏見、山科、大阪、赤穂などに散在する同志と円山重阿弥の別墅に

会合した上、いよいよ仇討決行の旨を宣言した。そして、自分も十月の末には江戸へ下るから、面々においてもそれまでに、二人三人ずつ仇家へ気づかれぬよう内々で下向せよと言いわたした。それを聞いて、義徒は皆踊躍した。中にも堀部安兵衛は、大石と離れてさえ決行しようとしていただけに、明くる朝すぐに発足して、潮田又之丞とともに江戸に走せ下った。この二人は、途中浜松の駅で、芸州へ流されて行く浅野大学の一行に出逢ったが、後難の相手の身に及ばんことを恐れて、わざとお目通りを願わないで、素知らぬ顔に行き過ぎてしまったと言われる。

横川勘平は円山会議に先立って、七月の末にはすでに江府へ下っていた。つづいて岡野金右衛門、武林唯七、それに毛利小平太

の三人も八月の二十七日に江戸へ着いた。それに次いでは、吉田沢右衛門、間瀬孫九郎、不破数右衛門の三人が九月二日、矢頭右衛門七も単独にて同じく九月二日、千馬三郎兵衛、間重次郎、中田理平次は同月七日、木村岡右衛門、大高源吾も九月中というように、同志の士は続々江戸へ下った。しかも大石自身は、後を清くして立つたためには何かと用事もあつて、そうきゆうに京師けいしを引払うわけにも行かない。そこで同志の心を安んずるために、まずせがれちから俵の主税に老巧間瀬久太夫を介添かいぞえとして、大石瀬左衛門、茅野かやの和助、小野寺幸右衛門などとともに、自分に先立つて下向させることにした。一行は九月十七日に京都を立つて、同月二十五日には無事江府に下着げちやくした。そして、石町こくちようの旅人宿りよじんやど小山屋に、

江州ごうしゅうの豪家垣見左内公儀に訴訟の筋あつて出府したと称して
 逗留とうりゆうすることになった。それと見た一党の士気は、こうなれ
 ばもはや太夫たゆうの出府も間はあるまいというので、いよいよ振いた
 った。

三

これより先前さき原伊助、神崎与五郎かみやとぎよごろうの両人は、内蔵助の命を帯
 びて、すでにその年の四月中江戸に下っていた。これは吉良、上
 杉両家の近きんき情きょうを偵察するためで、内蔵助もそのころから主しゆう
 家の再興かをしよせんおぼつかなしと見て、そろそろそれに処す

る道を講じておいたものらしい。で、前原は米屋五兵衛とへんみよ変

名うして、相生町三丁目たながに店借りして、吉良邸の偵察に従事する

し、神崎は美作屋みまさかや善兵衛と名告なのつて、上杉の白金の別墅べっしょには

ど近い麻布谷町に一戸を構えた。これは上野介が浪士の復讐を恐

れて、実子上杉弾だんじょう正大だいひつ弼綱つなのり憲の別邸かくに匿かくまわれているとい

うような風評うわさがあつたからにはほかならない。が、それは風評うわさだけ

に止まつて、主として本所の邸に住んでいることが分つたので、

おいおい同志が出府してくるころには、与五郎も谷町の店をしま

つて、前原の米屋の店へ同居することになった。そして、美作屋

では、自分の生しょう国ごくから取つたものだけに、気が指さしたのか、

あらためて小豆屋あずきや善兵衛と名告つて、扇子や鬢びんつけの荷しよを背負しよい

ながら、日々吉良邸の内外を窺^{うかが}った。が、同邸でも見慣れぬ商人と見れば、いつさい邸内へ入れぬようにして、用心堅固に構えている。その中を潜^{ひそ}めてはいりこもうとするのだから、こちらの苦心はひととおりでなかった。が、そんなことにあぐむような彼らでもなかった。日夜その機会を覘^{ねら}っていて、それ火事だ！ とでも言えば、真先に屋根へ駆け上^あって、肝心の火事はよそに、向側の吉良邸の動静を目を皿^{はら}のようにして窺^{うかが}ったものだ。

円山会議の後、真先に江戸へ下^{くだ}った堀部安兵衛は、浪人剣客長江長左衛門という触れ込みで、米屋の店にほど遠くない林町五丁目^{しやくたく}に借^{しやくたく}宅^{たく}した。前^{ぜん}哨^{しょう}たる米屋の店と聯^{れん}絡^{らく}を取^とって、何かの便宜^{べんぎ}を計^{はか}るためであつたことはいうまでもない。この借^{しやくたく}宅^{たく}に

は、在府の士小山田庄左衛門を始めとして、七月中安兵衛より一足先に江戸へ下った横川勘平、一足後れてすぐその後から下つてきた、毛利小平太の三人が同居した。そして、横川は三島小一郎、小平太は水原武右衛門と変称した。なお前者は、身分こそ五両三人扶持の徒士かちにすぎなかつたが、主家没落の際は、赤穂城から里余よの煙硝蔵に出張して、籠城ろうじょう 殉死じゆんしの列に漏れたといふので、それと聞くや、取る物も取りあえず城下へ駆けつけて、内蔵助の許ところへ呶鳴りどなこんだほどの氣鋭の士であつたから、偵察の任務についても人一倍大胆に働いた。小平太も安兵衛だの勘平だのという氣性の勝つた連中といつしよにいては、一人ぐずぐずしてはいられない。それに同宿の士の中では比較的小身者であつただ

けに、横川とはことに仲よくしていたので、同じように仲間ちゆうげんこ

小者ものに身を扮やっして、仇家の偵察にも従事すれば、江戸じゆうを走り廻つて、諸所に散在している同士の間れんらくに聯絡をも取つていた。で、誰一人小平太の心底を疑うものもなければ、彼自身もそれを疑うような心は微塵みじんもなかつた。

ところで、十月の半なかばごろまでには、後れて上方を発足した原総右衛門、小野寺十内、間喜兵衛なぞの領りよう袖しゆう株かぶ老人連も、岡島八十左衛門やそえもん、貝賀弥左衛門なぞといつしよに、前後して、江戸へ着いた。最も後れた中村清右衛門、鈴田重八の兩人も、十月の三十日には江戸へ入つて、安兵衛の長江長左衛門の借宅に同宿することとなつた。中村は小山田庄左衛門なぞと同じく百五十石取

りの上士で、鈴田は三十石の扶持米を頂いていたものであった。

頭領大石内蔵助もいよいよ十月の七日には京師けいしを発足した。それに従う面々は、潮田又之丞（前に安兵衛とともに下つて、ふたび上方へ取つて返したものの）、近松勘六、菅すが谷半之丞、早水はやみ藤左衛門、三村次郎左衛門、それに若党仲間どもを加えて、同勢すべて十人、「日野家人垣見五郎兵衛」と大書した絵符を両掛長持ふに附して、関所関所の眼を眩くらまししながら、五十三駅を押下つた。そして、二十三日には鎌倉雪の下着、ここで江戸から迎いに
出た吉田忠左衛門と出会つて、打合せをした上、三日の後いっしよにそこを立つた。そして、かねて準備しておかれた川崎在平間村の一屋おくに入った。ここに十日間ばかり滞在して、江戸の情勢を

窺^{うかが}つていたが、差^さ問^{しつ}えなしと見て、十一月の五日にはとうとうお膝元へ乗りこんできた。そして、前月来俸主税が逗留している石町の旅人宿小山屋に、左内の伯父と称して宿泊することになった。江戸にあった同志は、それとばかりに、人目を忍んで、かわるがわる内蔵助の許^{ところ}に伺^{しんこう}候した。いよいよ年来の宿望を達する日が近づいたのである。

が、内蔵助の到着とともに、かねて連盟の副頭領とも恃^{たの}まれていた千石取りの番頭奥野将^{しょうげん}監^{けん}、同じく河村伝兵衛以下六十余人の徒^{ともがら}輩が、いよいよ大石の東下^{とうげ}と聞いて、卑^{ひき}怯^{きよう}にも誓約に背^{そむ}いて連盟を脱退したことが判明した。もつとも、その中には、前から態度の怪しかったものもあるにはあった。が、内蔵助の叔

父小山源五右衛門、じゆうてい従弟進藤源四郎など、義理にも抜けられない者どもまで、こうじつ口実を設けて同行を肯がえんじなかつたと聞いては、先着の同志もあき惘れて物が言えなかつた。中にも、血氣の横川勘平のごときは、

「あいつらもともと汚い奴やつばら輩だ。この春討つて捨てようと思つたのに、手延びにして残念だ！」と、齒噛みをして口惜しがつた。

が、神崎与五郎はそばからそれを宥なだめるように、

「なに、今になって退のくような奴らは、皆大学様の御左右ごさうをうかがつて、万一お家お取立てになつた場合、真先にお見出しに預あずかろうという了りようけん簡かんから、心にもない義盟に加わつてきたのだ。そんな奴らが何人いたつて、まさかの時のお役に立つものでない。

仇討は吾々だけで十分遣やつてみせるよ」と言つた。

勘平もそれには異存がなかつた。

とにかく、一時百二十余名に上のぼつた義徒の連盟も、江戸へ集まつた時には、こうして五十人余りに減つてしまつた。が、それだけにまた後に残つたものの心はいつそう引締つてもきた。少なくとも、人数の減少によつてぐらつくようには見えなかつた。

が、十一月の二十日になつて、こうじまち麴町四丁目千馬三郎兵衛の

借宅に、間喜兵衛、同じく重次郎、新六なぞといつしよに同宿していた中田理平次が、夜逃げ同様にしゅっぽん出奔したという知せが同志の間に伝わつた。江戸へ下つた者はまさかだいじようぶだろうと思つていただけに、同志もこれには吐胸とむねを吐いた。現在同志と

思っている者も宛にはならぬというような感情も湧いて、互に相手を疑うような気持にもなった。中にも、小平太は少なからぬ衝し撃げきを受けた。

「そうだ、同志も宛にはならぬ。だが、俺はどうだ、俺は宛になるか」

そう思った時、彼はぎよつとして思わず身を竦すくめた。彼といえども、最初連盟に加わった時から、一死はもとより覚悟していた。仇きゆう家に討入る以上、たといその場で討死しないまでも、公儀の大法に触れて、頭領始め一同の死は免れぬまぬかということも知らないではなかった。が、一方ではまた、仇討は仇討だ、君父の仇を討ったものが、たとい公儀の大法に背そむけばとて、やみやみ刑死に処

せられるはずはない。お上かみでも忠孝の士を殺したら御政道は立つまいというような考えが、心の底にあつて、それが存外深く根を張つていたらしい。

「だが、相手には何しろ上杉家という後うしろだて楯がある」と、小平太は今さらのように考えずにはいられなかつた。「その上杉家はまた紀州家を仲にして將軍家とも御縁さばつづきになつてゐるのだ。去年三月の片手落ちなお裁さばきから見ても、また今度の大學様の手重い御処分から見ても、吉良家に乱入したものをそのまま助けておかれるはずはない。必ひつじよう定一党の死は極きわまつた！」

彼は頸うなじの上に振上げられた白刃はくじんをまざまざと眼に見るような気がした。同じように感ずればこそ、理兵次も垢はじを含んで遁亡とんぼう

したものに相違ない。といって、自分は今さら命惜しさに同志を裏切る気にもなれなければ、またそれだけのあつかましさも持合せていない。

「なに、俺一人で死ぬのじやない」と、彼はしばらくしてようよう乾かつばしや燥ぼいだようなな声でつぶや呟いた。「死ねば皆いつしよに死ぬのだ！」

こう自分で自分に言つて聞かせてから、何人だれも見えていたものはなかつたかと心配するように、そつと眼を上げてあたりを見廻した。気がついてみると、じつとりと頸筋くびすじのまわりに汗を掻いて、自分ながら顔色の蒼醒あおざめているのがよく分つた。

その後、小平太はできるだけ自分の心の動揺どうようを同志の前に

隠すように努めた。もつとも、彼が同志に心のうちを覺られまいとするには、もう一つほかに理由があつた。それは彼に一人の情婦があつたからだ。亀井戸天神の境内で井上源兵衛の娘おしおに出逢つて、あわれな身の上話を聞いてからというもの、宿へ帰つてもその女のこと気がなつて、どうも心が落着かなかつた。で、明くる日はさつそくわずかばかりの手土産を持つて、かねて聞いておいた七軒長屋に母親の病気を尋ねてみた。が、行つてみると、聞いたよりはいつそう惨めで、母親は持病の痛風で足腰が立たず、破れた壁に添うて寝かされたまま、娘が茶店の隙間をみては、駈け戻つて薬餌をすすめたり、大小便の世話までしてくれ、るのを待つていゝというありさまであつた。あまりの気の毒さに、

小平太はその後もちよくちよく見舞いに寄つたが、若い者同志とて、いつしか二人の間に悪縁が結ばれてしまった。小平太にしてみれば、母娘に対する同情から出たとはいえ、大事を抱えた身の末の遂げないことはよく知つている。悔恨と愛慾とは初めから相あいせめ鬨いせめいだ。が、女の方では、そんなこととは知らないから、世にも手頼りない身の盲亀もうぎの浮木に逢つた気で、真心籠めて小平太に仕つかえる。小平太もそうされて嬉しくないことはない。同志に隠れて、使走りの廻道をしては、夕方からこそそと妙見堂の裏手へはいつて行く。夜分どうしても都合の悪い時は、茶店へ顔を見に行く。そういうおり、彼はいつでも上方における大石の廓くるわがよ通といのことを想いだして、自分で自分に弁い解わをした。もちろん、

頭領がしたから自分も遣つていいというのではない。ただ内蔵助が茶屋酒に酔い痴しれながら、片時へんじも仇討のことを忘れなかつたように、自分も女のために一大事を忘れようとは思わない。それだけにしばしの不埒ふらちは容赦ようしやされたいというのが、せめてもの彼の願ひであつた。そして、暇ひまさえあれば、足は柳島の方へ向つた。

四

ところが、おしおの母親は、十一月の半ばから陽氣のせいか、どつと重じゆうたい態たいになつて、娘の精根を尽した介抱も甲斐なく、十日余りも悩みに悩んだあげく、とうとう死んで行つた。おしおは

身も浮くばかりに泣いた。そばにいた小平太も、母親がわが身の苦しさも忘れて、息を引取る間ぎわまで、「おしおのことを頼む頼む」と言いつづけにしたことを思うと、何だか目に見えぬ縄なわで縛しばられているような気がして、ぼんやり考えこんでしまった。が、これまでの行きがかりからいつても捨ててはおおかないので、同志の前は大垣の支藩戸田だんじょうのすけうじしげこう 弾正介氏成候の家来で、彼には実兄にあたる山田新左衛門の許ところに世話になっている母親の病氣と繕つくろつて、二日ばかり同宿の家を明けて、型ばかりの葬式でも出させるようにした。

で、それがすんでからいったん宿へ帰ったが、気になるので、一日置いてまた出かけてみた。おしおはもう片時かたとぎも小平太のそば

を離れない。「どんな苦勞でも厭いませぬから、どうかわたしをおそばへ引取ってくださいませ。一人の母にさえ別れては、こうしているのが女の身では心細うてなりませぬ」と、男の膝ひざに縋すがつてかき口説くどいた。

「そう言いやるのももつともじやが、わしも今では他人の家にやつか厄やく介いになつてゐる身……」

「では、どうぞあなたがここへ引移うつってくださいませ。こんな穢むさい所でお氣の毒ですが、たとい賃ちんしごと仕事をしてなりとも、わたしはわたしで世過よすぎをして、あなたに御迷惑は懸かけませぬ」と、女の腰はなかなか強い。

これには小平太も当惑した。心の中では、こうしてだんだん身

抜きのできない深みへはまってきた自分の愚しさが、何よりもま
ず悔くいられた。が、今となつてはどうにもしかたがないので、一
時遁のがれの気休めに、

「それもそうだが、わしもいつまで浪人をしていゝつもりでもな
い。戸田様に御奉公をしている兄にも頼んで、方々へ渡りがつけ
てあるから、近いうちには何とか仕官しかんの途みちも着つこうかと思つてい
る。その前に内密ないしよでそなたといつしよにすることが、骨折つて
くれている兄にでも知れたら悪い。たとい一合二合の切米きりまいでな
りとも、主取りしゅどさえできたら、きつと願いを出して、表向きそな
たを引取るようにするから、それまでのところは、寂しかろうが、
このまま御近所の世話になつていてもらいたい。あんまり引つこ

んでばかりいては、氣もくさくさするだろうから、しよなぬか初七日でもすんだらまた茶店へも出るようにしたがいい。なに、それも永いことではない。わしも暇さえあれば、ちよくちよく会いに来るからね」と、さまざまに言い拵こしらえて、やつと相手を納得させた。

で、その日の七つ下さげりに、小平太は屈くつ托たくそうな顔をしながら、ぼんやり林町の宿へ戻ってきた。すると横川勘平が待ち構えていて、相手の顔を見るなり、

「おお水原か、いいところへ戻ってきた。貴公でなくちやできない仕事がある」と、いきなり言いだした。そばには安兵衛の長左衛門も居合せて、何やら事ありげな様子に見えた。

「何だ何だ？」と、小平太も心のうちを見透みすかされまいと思うから、

わざと威勢よく二人のそばへ顔を寄せて行つた。

「じつはあの両国の橋の袂たもとにいる茶坊主珍ちんさい斎さいな」と、勘平は声を潜ひそめてつづけた。「あいつはいつかも話したとおり例の山田宗そうへん徧へんの弟子で、やはりト一ぼく（上野介の符牒ふちよう）の邸へ出入りをしている、茶会さかいでもある時は、師匠のお供ともをして行つて、いろいろ手伝いもしているという話だから、またなにか聞きだすこともあろうかと、この間からそれとなく取入つておいたがね、今日はか
らずそいつの手からト一の家老小林平八郎に宛てた書面を手に入れたんだよ」

「ふむふむ！」

「つい今の先のことだ、ぶらりとはいつて行くと、これはいいと

ころへ来てくれた、また一筆頼むと言うじやないか。なに、この坊主がお茶はできるかしらんが、無類の悪筆でね。これまでも二
三度頼まれたことがあるから、おやすい御用と引請けて、さて宛
名はと聞いてみると、小林だ。しめた！ とは思ったが、色にも
出さず、相手の言うままに認め^{したた}た上、自分もあちらの方面に所用
があるから、何なら私が届けて進ぜましょう、御返事があるよう
ならまた房路^{もどり}にと、うまく言^{つかい}って使者まで請合^{つかい}つてきた。それは
いいが、何しろ俺はこの前あの邸へはいりこんで、うろろうして
いるところを掴^{つか}みだされた覚えがあるから、二度とあそこへは行
かれない。と言^{つか}って、長左衛門^どのでは顔が売れているから、ど
うも目に立つし、気はせきながらも、貴公の帰りを待っていたの

だ」

「そうか」と、小平太はぐつと固唾かたずを呑み下しながら言った。

「よし、それでは俺が引請けた」

「うむ、すっかり遣やつてくれ」

「心得た。で、念のために聞いておくが、この手紙の用件は？」

「いや、それは何でもない。かねて小林から頼まれていた品が見つかった。いずれ近日持主同道で持参するからよろしくというだけだ。いずれ茶器か何かのことだろうよ。だが、貴公は何にも知らない体ていで、ただ使者つかいに來たようにしておいた方がいい」

「それもそうだな」

「とにかく、またと得られない機会だ」と、勘平はさらに自分の

注文をつづけた。「できるだけ邸内の様子を細かに見てきてもらいたい。近ごろ長屋と母屋おもやとの間に大竹の矢来を結ゆい廻して、たとい長屋の方へ打入れられても、母屋へは寄りつかれないようにしてあるという噂うわさも聞くが、このごろはあちらでもお出入り以外の物売はいつさい入れないようにしているから、最近の様子はさっぱり分らない。そのへんも十分見届けてきてもらいたいな」

「それに」と、安兵衛もそばから言葉を添えた。「かねがね山田宗徧のところへ弟子入りをしている脇屋氏わきやうじ（大高源吾のこと、京都の富商脇屋新兵衛と称して入りこむ）から、吉良邸では来月の六日に年忘れの茶会があるという内報もあつた。すれば、五日の夜は必ひつじよう定きわ上野介在宿に極きわまったというので、討入はおおよ

そその夜のことになるらしい大石殿の口ぶりでもあった。だが、頭領としては、その前にもう一度邸内の防備の有無を見定めておきたいと言われるのだ。で、もしお手前の働きでそのへんの事情が確実に分つたら、吾々が待ちに待った日もいよいよ近づいたというものだ。大切な役目だ、しっかり遣つてきてもらいたい」「心得ました」と、小平太はそれを聞いて、きゆうに胸をどきつかせながらも、きっぱり返辞をした。

「くれぐれも仕損じのないようにな」と、安兵衛はなお念を押すように言った。「この場になつてしくじつたら、それこそ大事去るだ！ その心得で遣つてきてもらいたい」

「よく分つております」と、小平太も緊張にやや蒼味を帯びた顔

を上げて言った。「万一見咎められるようなことがありましようとも、一命に懸けて御一同の難儀になるようなことはいたしませぬ」

「その覚悟で行けば、しくじることもあるまい。だが、見破られないうちに、こちらの思う所を見てくるのが肝心だ。くどいよ
うじやが、その心得でな」

「かしこま畏承りました」

小平太はすぐに身支度をして、例の状箱を受取つて立ち上つた。何と思つたか、勘平も後から追すがい縋るように送つてでて、

「長左衛門どのの言われるとおり、向うの様子がもう少し知れないと、迂濶うかつに手は出せないという頭領始め領袖りようしゆうがた方の御意見

だ。しつかり遣つてきてくれ」と、皮肉らしく小声でささやいた。「その代りに、うまく行つたら当夜の一番槍にも優る功名だぞ」「うむ！」とうなずいたまま、小平太は黙つて表へ飛びだした。

五

小平太が進んでこの危い役割を引請けたのは、一つは心のうちを見透みすかされまいとする虚勢きよせいからでもあつたが、一つにはまた、ここで一番自分の働きぶりを見せて、中田理平次などとはまるで違つた人間だということを知の前にはつきり証拠立てておきたかつたからでもあつた。いや、同志の前というよりは、第一自分

の前に証拠立てたかった。だって、小平太の心を疑っているものは、何人だれよりもまず彼自身であつたから！　そこで彼は与えられた機会を、よく考えてもみないで、しやにむに掴つかんでしまった。が、一党に対する責任を思えば、安兵衛から注意されるまでもなく、この任務はあまりにも重かつた。もし怪しい奴と睨にらまれて、町奉行の手にでも引渡されたら……そして、どうしても密事を吐かねばならぬような嵌はめ目おちいに陥つつたら……

「そんなことにでもなれば、俺一人ではない、一党の破滅だ！」と、考えただけでも足の竦すくむような気がして、彼は思わず街まちの上に突立つつてしまった。

が、それとともに、「一命に懸けても」と二人の前に誓つた言

葉が彼の心にうか泛んできた。

「そうだ」と、彼はふたたび自分で自分に誓うようにつぶや呟いた。

「どんなことになろうとも、俺はこの口を開けてはならない。――責めらりようが、殺さりようが、たとい舌を咬くい切つてでも！――こんな烈しい言葉を用いながらも、彼はそれによつて、不思議に、何の衝撃をも、不安をも、恐怖をも感じなかつた。この場合、彼には命を投げだすということがきわめて訳もないことのように思われたのである。

「なに、死ぬ気でかかったら、何ほどの事があるろう？　こちらの覚悟一つだ！」

彼は力ちからあし足を踏ふみ緊しめるようにして歩きだした。見ると、も

う吉良家の裏門に近く来ている。かねて小豆屋善兵衛の探知によつて、家老小林の宅が裏門に近い所にあるとは聞いていた。が、それでは都合が悪いと思つたか、わざと表門へ廻つて、門番にかつた。

「お願いでございます、ちよつと小林様のお長屋へ通らせていただきます」

「小林様へ通るはいいが、いずれから参つた？」と、ひまつぶ暇潰しに網すきをしていた門番が面倒臭そうに聞き返した。

「へえ、両国橋のお茶道珍斎からお状箱を持ってまいりました」
「そうか、よし通れ！」

小平太はまず虎口ここうを免れたのがような気がした。が、ここでひとつ

落着いたところを見せておこうと、

「わたくし私は新参者でよく存じませぬが、小林様のお長屋はどちらでございましょう？」と訊いてみた。

「なに、初めて御当家へ参つたと申すか」と、足輕はやつと手に持った網から顔を上げた。「小林様はお玄関の前を左に折れて、中の塀についてお長屋の前を真直に行くと、一番奥の一軒建ちがそれだ」

「へえ、どうもありがとうございます。こちらへ参りますか、は、分りました」と、お叩頭しぎをしいしい、わぎとゆつくり足を運んで、遠目に玄関口を覗のぞいてみると、正面に舞楽ぶがくの絵をかいた大きな衝つ立いたてが立ててあるばかりで、ひっそり閑しずと鎮しずまり返っていた。が、

ここらで見咎め^{みとが}られてはならぬと思うから、言われたとおりに、すぐに左へ折れて、総長屋の前をぶらりぶらりと歩いて行つた。

長屋にはところどころ人声がして、どこからともなく水を汲む音、夕餉^{ゆうげ}の支度をするらしい物音が聞えてきた。が、どちらを見ても、別段目に立つような異状はない。大竹の矢来といったような嚴重な設備は、少なくともそのへんには見受けられなかつた。

彼はその間も始終右手の塀に目を着けていた。腰から下が羽目板になつて、上に小屋根のついたもので、その中が座敷のお庭先にでもなつているらしい。ところどころ風通しの櫺子^{れんじまど}窓もついているが、一つ一つ内側から簾^{すだれ}が下げてあるので、中の様子は見られない。爪先立ちをしてみても、植込^{うえこみ}の間から母屋の屋根つ

づきが、それもほんの少々窺うかがわれるばかりだ。

そのうちに、ふと一枚戸の中門が眼にとまった。ぴたりと閉めきつてあるので、そのまま行き過ぎようとしたが、念のためたと二三歩後戻りをして、前後を見廻しながら、そつとその扉とに手を懸けようとした。とたんに、行手の土蔵の蔭から声高な話声が聞えてきたので、小平太はぎよつとして飛び退のいた。見ると、二人連れの侍さむらいが何やら話しながら、すぐ目の前へ遣つてくるのだ。彼はすかさず、

「少々物をお訊ね申しますが」と、小腰を屈めながら言った。

「小林様のお長屋はどちらでございませうか」

二人は立ち留つて、じろじろ小平太の様子を眺めていたが、年と

嵩しかさの方が、

「なに小林様？ 御家老のお長屋はついその左手のお家がそうだと、顛あごをしゃくつて教えてくれた。

「へえ、ありがとうございます、まことに相すみませぬ」と、ぴよこぴよこ頭を下げながら、急いでその家のくぐり戸に手を懸けた。

二人の侍も小平太が門をはいるまでじつと後を見送っていたが、仲間ちゆうげんてい体ではあるし、状箱じやうばこは持っている、別に胡乱うろんとも思わなかったか、そのまま踵きびすを返して行ってしまった。

小平太はくぐり戸を閉めて、始めてほつと胸なを撫で下ろした。

一步違いで無事にすんだけれども、考えてみれば、實際危かった。剣呑けんおん剣呑けんおん！ と思いながら、気を取りなおして、すぐ前の玄

関にかかった。そして、

「お頼もうします、お頼もうします」と、二度ばかり声を懸けた。「どうれ！」とどすがかかった声がして、すぐ隣の玄関脇の部屋から、小倉こくらの袴はかまを穿はいた爺おやさんが出てきた。

小平太はいきなり二つ三つ頭を下げて、

「私はお茶道珍齋からこの文箱ふぼこを持ってまいりました。どうかお取次ぎを願います」と、手に持った状箱を差出した。

取次の爺さんは黙ってそれを受取つて、朱塗りの蓋ふたの上に書いた宛名あてなの文字をつくづく眺めていたが、「ちよつと待て」と言い捨てたまま、奥へはいった。が、間もなく引返してきて、「すぐ御返事があるそうだから、しばらく待っておれ」と伝えた。そし

て、自分はすぐに元の部屋へはいつてしまった。

小平太はしばらくそこに立っていたが、だいぶ手間が取れるらしく、奥からは何の沙汰さたもない。この間だ！ この間にそこらを見廻つてやれとも思ったが、さっきの失敗に懲こりているので、もし自分のいない間に出てこられでもして、申し開きが立たなかつたら、それこそ百年目だ！ なに、まだ帰途かえりみちもあることだと、じつと辛抱しんぼうしているうちに、やつと奥で手の鳴る音がした。それを聞くと、例の爺さんはそそくさと襖ふすまを明けてはいつて行つたが、すぐにまた取つて返して、

「待ち遠であつたな。この中に御返事が入っているそうだ。よろしくと伝えてくりやれ」と、小平太の持つてきた状箱を渡した。

「畏^{かしこま}承りましてございます。そのほかにお言伝てはござりませぬか」

「うむ、これを持ってまいれば分るそうだ」

「さようでございますか、どうもお邪魔いたしました」と、小平太はお叩頭^{しげ}をして、そのまま表へ出た。

さあ、これからはもう帰るばかりだ。が、これだけではせつかく来た甲斐がないような気もした。第一、同志の連中が何と云うか知れない。彼には何よりも同志の思わくが気になった。で、右へ行けば表門へ出るのを、わざと左へ取って、角の土蔵について廻つてみた。すると、もうそこに裏門が見えて、その正面にあたる所が裏口の小玄関にでもなっているらしい。それが眼に着くと、

彼はすぐに踵きびすを旋かえした。そちらの方面のことは、前原や神崎の手でおおよそ分つていたのである。

で、元来た道を引返していると、ふたたび例の中門が眼にとまった。見ると、前にはびたりと閉めきつてあつた戸が、どうしたのやら一寸ばかり透すいている。想うに、さつき逢つた侍がここからはいつて、つい閉め残したものであるらしい。小平太は天の与えとばかりに胸を躍おどらせた。が、遽あわてるところではないと、前後を見廻して、人目のないのを見定めながら、つと扉とに身を寄せ、その隙間から覗のぞきこんだ。目の前はやっぱりお庭先の植込らしく、木の枝に視線は遮さえぎられるが、それでも廻縁になつた廊下が長くつづいて、閉たてきつた障しょうじ子にあかあかと夕日の射している

さまが、手に取るように窺うかがわれた。上野介の居間がどのへんにあるかは、もとより知る由もない。が、左手に見える檜垣ひがきの蔭には泉水でもあるらしく、ぼちやんと鯉の跳ねる音も聞えてきた。小平太はだんだん大胆になって、少しずつ門とびらの扉を開けて行つた。もう少しで頭だけ入りそうになつた時、すうと向うに見える障子が明いて、天てん目もくを持つた若い女が縁側にあらわれた。彼はぎくりとして思わず後へ退つた。が、間あいが離れているので、向うでは氣のつくはずもない。そのまま廊下づたいに、音もなく下手しもてへはいつて行く。

小平太は振返つて、用心深くあたりを見廻した。幸いに、どこから見ていられた様子もない。この上危い思いをして覗いていて

も得るところはあるまい、ここらが見切り時だと、彼は急いで門を離れた。が、せめて長屋の戸前でも数えて行ってやれと、心中でそれを読みながら歩いているうちに、不意に背後で「わあッ！」という声がして、五六人の子供が彼のそばをばたばたと駈けだして行った。一人の吹矢を持った男の子の後から、大勢がいつしよになつて駈けだして行くのだ。彼はまた胆を潰した。が、それと分ると、まあ、あそこにぐずぐずしていないで、いい塩梅だと思つた。そのうちにとうとう表門まで来てしまつた。で、「どうもありがとう存じます、行って参りました」と、もう一度門番に挨拶をして、街の上へ出た。

六

小平太は一丁ばかり来て、始めて吾に返つたように息を吐いた。別段取りたてて吹ふいちよう聴ちようするようないが、使命だけは無事に果した。これだけ見てくれば、同志の前に面目の立たぬようなこともあるまい。そう思つて、彼はまた駈かけだすようにして林町の宿へ歸つた。宿には安兵衛、勘平の兩人はいうまでもなく、吉田忠左衛門の田口一真まで来合せて、彼の歸宅かえりを待つていた。気早の勘平は、足音を聞くや、縁先まで駈かけだしてきて、「おお歸つてきたな、首尾しゆびはどうだつた？」と、いきなり訊たずねた。「うむ！」と言つたまま、小平太はもう一度振返つて、後を跟つけ

るものの有無を見定めてから、始めて座敷へ上った。

奥の座敷には、忠左衛門と安兵衛の二人がひそひそと対談していた。小平太はまず忠左衛門に一礼して、さて安兵衛と勘平の前に持って帰った状箱を差出した。

「ふむ、これが返事だな」と、安兵衛は手に取って、ちよつとその上書に眼をやったが、すぐにまたそれを下に置いて訊ねた。

「して、邸の様子やしきは存分に見てこられたか」

「あらまし見てまいりました」

こう前置をして、小平太は指先で畳の上に図を描いてみせながら、はいつて行った時から出てくるまでの顛末てんまつを仔細に述べはじめた。勘平はそばから硯すずりに料紙を取って渡した。で、それによ

つて、ふたたび見取り図を描いて説明しながら、

「まずこういったあんばいでございます」と、話しを結んだ。

「私の見たところでは、思いのほかに薄手な屋敷で、長屋にも母屋にも、噂に聞いた竹矢来なぞいつこう見当りませんでした。間^ま々女子供の声は聞えましたが、いつたいにひっそりとして、格別の手配りがあるうとも思われず、風説はただ風説にすぎないかと存ぜられました」

「なるほど」と、忠左衛門は大きくうなずいた。「だいたいわれらが考えていたとおりであるな」

「さようでございます」と、小平太はさらに語を継いだ。^{ことば}「で、戻路にはせめてもと存じまして、長屋の位置を見がてら、その家^{もと}

紋を読んでまいりましたが、だいたい表通りに向つた一棟と、

南側に添うた一棟と、総長屋は二棟に別れておりまして、戸前の数は三十あまり四十戸前もございませうか。そのほかに家老小林の住宅は、別に一軒建ちになっておりました」

「いや、よく気がつかれた」と、忠左衛門は相手の労を犒うように言った。「これで邸内の防備に対するだいたいの見当もついた上に、当夜出会いそうな相手方の人数もほぼ分つたというものだ。太夫に申しあげたら、さぞ喜ばれるじやろう。小平太どの、大儀でござつたな」

「ついでには、横川、お身ひとつその文箱を茶坊主の許へとどけてくれんか」と、安兵衛はそばから口を出した。「これは貴公でな

いといかんからな」

「心得ました。さつそくとどけることにいたしましょう」

「そうだ」と、忠左衛門も言った。「御苦労だが、そう願うことにしよう。ところで、小平太どのの内偵は、拙者から久右衛門殿（池田久右衛門、山科以来大石の変名）に伝えようが、それよりもお身自身の口から申しあげた方がいいかもしれない。どうだな、これからすぐに石町へ同行しては？」

「は、私が参った方がよろしければ、すぐに御同道いたします」

「ああ、そうなさい。それから横川氏、貴公もその文箱をとどけたら、あちらへ参られい。このたびのことは、一つはお手前の働きでもあるから、一足先へ行って、拙者から太夫によく申しあげ

ておくよ」

「恐れ入りました。それでは、いずれ後ほど御意ぎよいを得ることにし
まして、私は一走り行ってまいります」と、勘平は会え釈しゃくして立
ち上った。ちよつと間を置いて、忠左衛門も小平太を伴つれてその
家を出た。

二人が小山屋の隠宅へ着いたのは、日脚の短い時節とて、もう
そろそろ灯火あかりの点つくころであつた。寒がりの内蔵助は、上かみの間の
行灯あんどんの影に、火桶を前にして、一人物案じ顔に坐つていた。で、
まず忠左衛門から口を切つて、小平太が今日吉良邸へ入いりこむよ
うになつた次第を紹介した。その尾について小平太も、自分が見
てきた邸内の様子を落ちなく報告に及んだ。内蔵助は眼つぶを瞑つた

まま、じつとそれに聴き入っていたが、やがて相手の言葉が途切れるのを待って、

「ふむ、そう分つてみれば、もはや遅疑ちぎする場合にはないな」と、ぽつつり口を開いた。

「さよう！」と、忠左衛門はすぐにそれに応じた。「六日の茶会さかいを外したら、悔くいて及ばぬことにもなりましょう。それがすめば、さつそく白しろか金かねの上杉家の別邸へ引移られるはずだと、たしかな筋から聞き及んでもいますからな」

「それもある」と言つたまま、内蔵助はまたしばらく眼を瞑っていた。が、ふたたび口を開いた時は、持前の低声ではあるが、いつになく底力が籠っていた。「で、いよいよそれと決定すれば、

あらためて一同にも通告するが、面々においてもその心得で、それぞれその用意をして待っているように伝えてもらいたい。それにしても、小平太、今日は御苦勞であつたな。内蔵助からも厚く礼を言うぞ」

「は、ありがとう存じます」と、小平太は畳に手を突いたまま、きゆうに眼の中が熱くなるような気がした。彼としては太夫の前へ出て、自分で報告するさえ面晴れであるのに、こんな言葉まで懸けられようとは、ゆめにも思い設けなかつたのである。

彼はそれから次の間へ下つて、同宿の諸士といっしよに夕飯の御馳走になつた上、後から来た横川と連れだつて、上々の首尾でその宿を辞した。

で、二人並んで歩きながら、小平太は相手から話しかけられても、すぐには返辞をしないほど、深く考えこんでしまった。第一には、自分の小さな手柄が太夫に認められたのも嬉しかった。が、そればかりではなかった。太夫に認められたことによつて、ともすれば動揺どうようしやすい自分の心が、何かこう支柱つっぱりでもかわれたように、しゃんとしてきた。それが彼には何よりも嬉しかったのだ。

「そうだ、ああ言つてもらえば、俺にも死ぬる、立派に死んでみせられる！」と、彼は何度も心のうちで繰返した。

横川は横川で、延びに延びた討入の日取りがいよいよ決定したというので、妙に昂奮こうふんして、うきうきしていた。で、何かと小

平太に話しかけるのだが相手は上の空で、いつこう手応えてこたがない。「おい水原、最前から貴公は何を考えているんだ？」と、勘平はたまりかねて相手の肩を叩いた。

「俺？ 俺は……俺はそうだ、太夫のありがたいお言葉を考えていたのだ」

「そうか」と、勘平もうなずいた。「昼行灯ひるあんどんの何のと悪く言うものの、やっぱり太夫は偉いところがあるね。時には何となく生温いように思つて、俺なぞずいぶん喰つてかかったものだが、別に怒つたような顔もされない。いくらこちらがいきりたつていても、一言ひとことあの仁じんから優しい言葉を懸けられると、すぐにまたころりとまいって、やっぱりこの人の下に死にたいと思うからね。

人柄というか、何というか、あれが持つて生れた人徳にんとくだらうな」

「うむ、だがしかし、ああいうお言葉を頂戴するにつけて、俺は貴公にすまないような気がする。これも貴公が手柄を俺に譲つてくれたおかげだからな」

「なに、そんなことはお互いだ」と、勘平は快活に笑つた。「それに手柄を譲るも譲らないも、俺にはあの邸へはいれなかつたんだからな。貴公の働きは貴公の働きだよ」

「いや、そうでない」と、小平太はあくまでまじめであつた。

「俺は貴公のおかげで救われた。この恩は忘れない、死んでも忘れない！」

彼はいきなり勘平の腕を掴つかんだまま、つづけざまに頭を下げた。

その眼には涙が光っていた。勘平は妙な気はしたが、相手がまじめなだけに、黯然あんぜんとしてそれを見守っていた。

こうして二人は長い間両国の橋の上に立っていた。

七

いよいよ討入は十二月五日の夜と決定して、その旨頭領大石からそれぞれ通達された。一同は一種の昂奮こうふんをもってそれを受取った。五日といえ、あますところ日もない。とうとう年来の宿望を遂とげる日がやってきたのだ。それとともに、生きてふたたびこの娑婆しやばへ出てこられようとも思われない。で、それとは言わぬ

が、めいめいその覚悟をして、故国くにの親類縁者へ手紙を出すものは出す、また江戸に親兄弟のあるものは、それぞれ訪ねて行って、それとなく訣別わかれを告げるといふように、一党の気はいはどことなく騒ざわだつてきた。

十一月も晦日みそかのことであつた。小平太は朝から小石川の茗荷みょうが谷だににある戸田侯のお長屋に兄の山田新左衛門を訪ねて行つた。

おりよく兄も非番で在宿していた。久しぶりに来たといふので、母親も喜んで、二人の前に手打ち蕎麦そばを出してくれた。で、しばらくよもやまの話しをしていたが、小平太はおりを見て、

「時に兄上」と切りだした。「永い間こちらへもいろいろ御迷惑を懸けましたが、今度西国筋のさる御大身のお供をして、もう一

度^{かみがた}上^{のほ}方^{のほ}へ上ることになりました。で、今日はそのお暇^{いとまご}乞^いいかたがた参上したような次第でございます」

「ほほう、それは重^{ちようじよう}畳^{じよう}」と、兄は何も気がつかぬように言つた。「わしもお前のためには、これまで縁辺をたよつて、ずいぶん方々へ頼んではおいたが、どうも思うに任せぬ。そういうことになれば、誠^{まこと}にけつこうな次第だ。で、今度の御主人というのはやはり御直参でもあるのかな」

「いえ、それが」と、小平太はちよつと口^{くちごも}籠^{こも}つた。「御^ご陪^{ばい}身^{しん}ではござりますが、さる西国大名の御家老格……私としては、もはや主人の選^えり好みはしていられますね」

「それはそうだ。武士としては、主人を失つて浪人しているくら

い惨めなものはない。主取りさえできれば、何よりけつこうだ。^{しみ}^{しゅうど}

時にお前は」と、新左衛門は何やら想いだしたように言い添えた。
「去年の暮にも、元浅野家の城代家老大石殿のお供をして、上方へ上ったが、あの方はまだ山科とやらにおいでかな」

「大石様でございますか」

「うん、その大石殿さ」と、新左衛門はじつと弟の顔を見詰めたがらつづけた。「じつはその大石殿が、何やら思いたつことがあって、近ごろ江戸に下られたという噂を耳にした。いや、大石殿ばかりではない、旧浅野家の浪人どもおいおい江戸に参着して、何やら不穏なことを企んでいるという風説もある。もつとも、風説にすぎぬかもしれないが、去年以来の成行を思えば、全然風^{なりゆき}

説のようなことがないとも言われない。お前はどうか？ かねて
上方かみがたではだいぶ大石殿のお世話になったというが、まさかお前
がその一味に加担しているようなことはあるまいな」

「はッ」と言つたまま、小平太はちよつと顔が上げられなかつた。
「じつはその風説を耳にしてから、ぜひ一度お前に会つて訊きいて
みようと思つていたところだ。今聞けば、さる西国筋の御大身に
主しゆうど取りをしたと言いながら、わしにその名を明そうともしない。
で、万一小前がそういう企てに加担していたら、兄弟のわ
しには包まず明すがいいぞ」

小平太はふたたび「はッ」と言つたまま、頸筋うなじを垂れて、じつ
と考えこんでしまった。そこまで知つていられては、もう是非ぜひが

ない。それに、そういう風説を耳にしながら、今日まで黙つていたところを見れば、兄もこのたびの一拳にまんざら同情がないわけでもあるまい。まして戸田家と浅野家とは御親類の間柄だ。ここで俺が戸田家の家来たる兄に有あり様ようを打明けてみたところで、別段差さ障ざわりの生ずるようなこともあるまい。このたびの事は、親兄弟たりともいつさい漏もらすまいという誓約はある。しかも、その誓約はけつして正確に守られていないとすれば、俺一人頑固にそれを守り通してみたところで、何になろう？ それよりも、ここで打明けて、兄の同情と支援とが得られたら、自分としてもどのくらい心強いかしれない。心強いばかりでなく、同情を寄せていくれる兄の手前としても、俺は後へ退けなくなるではない

か。そうだ、それが何より肝心だと心に思案して、

「で、もし私がその企てを知っているとしましたら？」と、上眼に兄の顔を見上げながら、おずおず言ってみた。

「知っているとするれば、お前は一味に加担しているのだな！」と、新左衛門の声は思わず筒抜けつつぬけた。

「はい、加担しております」と、小平太も度胸を定めて言いきつた。「主家の没落に遇あつて武士の意気地いきじを立てるには、そのほかにも道もおざりませぬ。兄上、お察しくだされい」

「ふむ、それは困ったことになったな」と、新左衛門は両腕こまぬを拱こまぬいたまま、溜息ためいきを吐いた。

「何とおおせられます？」と、小平太も顔色を変えた。「では、

兄上は大石殿の一挙に不同意じゃとおおせられるか」

「ずんと不同意じゃ」と、新左衛門は相手の眼を見返したま言
つた。「考えてもみい、今の浅野の浪人どもがそのような暴挙に

出て、お膝ひざもと元を騒がしたら、戸田のお家はどうなると思う？

去年内匠たくみのかみさま頭にんじょう様 刃 傷にんじょうの際にも、大垣の宗家そうけを始め、わが君

侯にも連座のお咎とがめとして、蟄居ちつきよ閉門へいもんをおおせつけられたで

はないか。今度そんなことがあれば、お家の興こうはい廢はいにも係かかわる一大

事じゃ。お前にはそれが分らぬか」

そう言われてみると、小平太には何と返す言葉もなかった。で、
しばらく俯向いたまま無言をつづけていたが、ややあつて、

「では、兄上は、私に武士の道を捨てよとおっしゃるか」と、心

外らしく聞き返した。

「そうだ、捨ててもらおうほかないな」と、新左衛門は言いきつた。
「いや、お前の心中は察している。兄としても、お前に武士の道を立てさせたい。しかし、わしにはわしの主君がある。主君の大事になると知って、お前をこのままにはしておかれぬぞ」

「とおっしゃるが、かりに私が退くとしても、大石殿始め一味の徒党が吉良殿の邸へ打入ったとしたら、どうなされます？」

「大石殿のことまでは、われら風情には力及ばぬ。ただ兄として弟がそんな大事に加担かたんするのを見てはおられぬと申すのじゃ」

「で、もし私がどうしても脱退せぬと申しましたら？」

「このまま引つたてて、当家の御重役うったに訴えでるまでじゃ」

こう言つて、新左衛門はすぐにも立ち上りそんな氣勢を見せた。

「ま、お待ちくだされ、しばらくお待ちくだされい」と、小平太は慌あわてて押留めた。ひよんなことを言いだしたばかりに、とんだことになってしまったとは思つたが、どうにもしかたがない。とにかく、ここは兄の言葉に従つたふりをして、この場を納めるほかないと思つたので、

「なるほど分りました」と、下を向いたまま言いだした。「一時の血氣はやに速はやつて、兄上の御迷惑になるとも知らず、一味に加担しましたのは、重々私の心得違ひでした。では、お言葉に従つて、大石殿始め同志の方々には相すみませぬが、誓約を破つて脱退することにはいたしましょう」

「しかとその気か」

「何しに虚偽いっわりを申しませぬ。私とてもしいて命を捨てとうはござりませぬ。その代りには、兄上、大石殿始め一党のことはどうぞ御内分にしてくださりませ」

「うむ、お前がそう心を改めた上は、わしも好んであの方々の邪魔をしようとは思わぬ。御一統の企てについては、ほかから漏れたら知らぬこと、わしからは金輪際こんりんざい口外こうがいすまい。それだけは固く約束しておくよ」

「どうかそのようにお願いいたします」

「しかし、お前としても今の言葉はどこまでも守ってくれねばならぬぞ」と、新左衛門はあらためて念を押すように言った。「お

前が浪人した上に、二人揃そろつて扶持ふちに離れるようなことがあつてはならぬからな——ま、これはここだけの話しじゃけれど」

小平太は黙つて相手の顔を見返した。

「俺たちには年を取つた母親もある」と、新左衛門は気が指したのか言いなおした。「わしにも大切だいじな阿母おかあさんなら、お前にとつても一人の母親だ。この老母を路頭に迷わせるようなことがあつてはならぬからな」

「ごもつともでございます」と、小平太も母親のことを言われた時は一ばん身に染みた。「ただこれまで事とともにしてきた関係上、にわかには同志に背を向けるようなこともいたしかねますが、近々のうちには機を見て身を引くことにして、けつして兄上つがと番

えた言葉は違たがえませぬから、その段はどうぞ御安心ください」

「それでやつと安心した。なに、お前の立場の苦しいことは、わしも察さしている。ただくれぐれもその言葉を違ちがえまいぞ」

小平太は唯い々いとして頭を下さげた。それから二三話わしてもしていたが、長居は無用と思おもったので、いずれそのうちまた出でなおして行くからと言いいおおいたまま、そこそこにその家を出でてしままった。

街の上へ出た時、彼は自分で自分自分が分わらなくなるほど顛てん動どうしていた。彼が予期予期したことはまるで反対の結果結果にななった。兄に打明打明けて、兄から同情同情と激げ励げの言葉言葉でも受けようと思おもっていたのに、かえってこちらの勇気勇気を挫くじかれたばかりか、あんな一時遁のがれの嘘嘘まで吐つかなければならぬ嵌は目めに陥おちってしままった。といいつて、

それを幸いに、その嘘を真ほんとう実にしようなぞという気はもうとう起らなかつた。彼にはあまりにも自己本位な兄の性根がありありと見え透すいていた。

「そうだ、兄が本当に主家を憂うる真心から、ああ言つて俺に迫つたのなら、俺はこのまま兄の言うことを聞いて、同志を裏切るような気になつたかもしれない。危あぶな殆あぶない、本当に危あぶな殆あぶないところだつた」

そう思いながらも、いっこうその兄に対する反撥はんぱつしん心の起らぬのが、自分でも不思議でならなかつた。彼は心のうちのどこかで兄を是認ぜにんしていた。しかも、それを突詰めてみることは、彼には怖ろしかつた。

彼はただ何とも言われない侘^{わび}しさと寂^{せきり}寥^{よう}とを感じて、とぼとぼと街の上を歩いていた。

八

林町の宿へ戻った時は、まだ日が高かった。同宿の者はたいてい出払って、一人小山田庄左衛門が人待ち顔にぼんやり居残っていた。そして、

「おお水原か、どこへ行つてこられた？」と声を懸けた。

「は」と言つたものの、小平太には兄の許^{ところ}へと実を言うのが何となく心苦しかった。で、「ちよつと知人の許^{もと}へ」と、その場を

まかしておいて、

「それにしても、あなたは江戸に親御もあれば、御縁者も多いはず、どうしてそちらへお出かけにはなりませんか」と反問してみました。

「なに、この期ごに及んで縁故のものをたずねても、何にもならぬからな」と、庄左衛門はわざと快活に笑ってみせた。

「でも、お父上一閑様は寄るお年波でもあり、さぞあなたを待ち侘びていられますよう」

「なに、あの親爺が」と、庄左衛門はそれでも寂しそうに言った。

「あれは御承知のとおりの一いっごくもの剋者、わたしが会いになぞ行こうものなら、今ごろ何しに来た？ 主君の仇も討たないうちに、何

用あつて親になぞ会いに来た？ と、頭から呶鳴りどなつけますわい。先ごろちよつと立ち寄つた時にも、いかい不興な顔をしましてな、もう来ても、二度とは顔を見せぬと叩きだすように追い返しました。八十を越した年寄とて、気にかからんでもないが、そんな訳で遠慮しておりますのじゃ」

「それはそれは」と言つたまま、小平太は自分の兄に引較べて、ちよつと返辞がでなかつた。「なるほど、お父上の気性ならそうもありましょう。立派な父御を持たれてお羨ましいうらや」

実際、彼は羨ましかつた。そういう父親を持つていたら、自分も今になつてこんなな心の動くこともあるまい。それにつけても、何と思つて兄になぞ大事を打明けたかと、今さらのように自分の

不覺を悔くやまずにはいられなかつた。

二人がそうしているところへ、表から足音荒く横川勘平がはいつてきた。そして、ぷんぷん腹を立てながら、

「おい、また裏切者が出たぞ！」といきなり喚よばわつた。

「裏切者？」と二人はいっせいに相手を見上げた。

「そうだ、裏切者が出た、しかもこの宿から出たのだ！」

小平太はぎくりとして思わず飛び上つた。何だか自分が今兄としてきた相談の一いちぶしじゆう伍一什をそのまま勘平に聞いていられたような気がしたのである。

「中村と鈴田の二人が朝から出て行つた」と、勘平は委細かまわず続けた。「俺はどうもその出方が怪しいと思つたので、君らが

出かけた後で、そつとその行李こつりを調べてみると、いつ持ちだしたもののやら、何一つ残っていないではないか。それには惘あきれたね。が、捨ておかれぬと思つたから、すぐに頭領ところかの許へ駈けつけてみた。すると、どうだ、太夫はもうちゃんと二人のことを知つていて、『どうも是非ぜひにおよばぬ』と言つていられるのだよ。聞いてみると、あいつらはもう書面でもつて脱退の旨を届けてきたんだ。そうな。その文句がいいね。『自分ども存じ寄りの儀があつて、今日限り同盟を退く。かねがね御懇情ごこんじようを蒙こうむつたが、年取つた親もあることとて、どうも思召しどおりになるわけに行かない。よつて自分どもは自分どもで一存を立てるつもりだから、どうぞ連判状から抜いてくれ』とあるんだとよ。奴らも今になってそんな

卑怯ひきようなことを言いだすくらいなら、何と思つてはるばる江戸ま

で下つてきたのだ？ 俺にはその了りようけん簡けんが分らないね」

「さあ」と言つたまま、小平太にはやつぱり返辞がでしなかつた。黙つて聞いていると、何だか自分が罵ののしられているようにも思われ

た。

「たぶん江戸へ来れば、何かよいことでもあるように思つてきたんだろうが」と、勘平はまだ余憤よぶんが去らないように、一人でつづけた。「それが、そんな話がないばかりか、討うちいり入いりの日取りまで極きよくつたといふので、吃驚びつくりして腰を抜かしたんだらうよ」

「まさかそうでもあるまい」と、小平太はようよう口を挾くわんだ。

「円山会議でいよいよ仇討と決した時、太夫から諸士へ廻まわされた

廻状にも、ちゃんとそれは明記してあったからな」

「それが慾目で分らなかつたのさ」と勘平は捨ててやるように言つて、からからと笑つた。「だが、あいつらのように恥を忍んで生き延びたところで、いつまで生きるつもりだ？ この先百年も生きやしまいし、^{おそ}晚いか早いか、どうせ一度は死ぬる身ではないか」

「そうだ、どうせ一度は死ぬる身だ」と、小平太は自分で自分に言つて聞かせるように^{つぶや}呟いた。

「それが分らないんだから情けないね」と、それまで黙っていた庄左衛門もぽつぷり口を出した。そして、三人ともそれぎり黙つてしまった。

「しかしね」と、しばらくして勘平は、何やら一人で考えているように言いだした。「俺に言わせれば、今になって返らぬことじやあるが、このように敵討かたきうちを延び延びにされた太夫のしかたもよくない。第一、それがために、吾々の仕事の方々へ漏もれてしまった。今までのところでは、それも別段差支さしつかえないようなものの、しかしだんだん士氣の沮喪そそうしてきたことは争われないぞ。せめてこの春にでも事を挙げられたら、百二十五人が五十人を欠くまでには減らなかつたらうに！ それを思うと、どうも残念でたまらないよ」

聞いている二人は思わず顔を見合せた。なるほど五十一人残っていた同志が、二人の逃亡によって、もはや四十九人になつてい

た。

「最初の脱盟者は例の高田郡兵衛だ」と、勘平は相手がそこらにでもいるように、一方を睨にらみつけながらつぶつけた。「あいつもこの春までは、安兵衛殿、孫太夫殿と並んで、硬派中の硬派と目されていた。それがどうだ、脱盟者の魁さきがけとなつてしまつたではないか。安兵衛殿の話に聞けば、何でも旗本の叔父から養子にと望まれたが、だんだんそれを断ことわつていゝうちに、そばにいた兄が弟は仇討の大望を抱かかっているから、お望みに応じかねるのだと、うっかり口を迂すべらしてしまつた。叔父はそれを聞いて、『なに仇討？ それは大変なことを考かんえている。天下の直じき参さんとして、そんなことを聞き捨すてにはならぬ』と言い張はつて、どうしても承知しな

い。そこで、叔父の言葉に従わなければ、大事が漏れて御一統にも難儀をかけるから、恥を忍んで身を退くと断つて、連盟から脱退したということだよ。なるほど、その言分だけを聞けば、いちおうもつともものようにも思われるが、そのじつはどうだか分つたものじゃないね。それほど儀を重んずる心があるなら、なぜ自分からまず腹を切らないのだ？ 命を捨てたら、どんな分らない叔父でも、まさか一統に迷惑を懸けるようなこともしでかすまい。それをしえないで、おめおめと養子になって生き延びているのは、何といつても命が惜しいからだよ。ね、そうじゃないか」

「そうだ、命が惜しいからだ」と、小平太は反射するように言った。実際、彼は自分でも何を言っているか分らなかつた。彼はた

だ郡兵衛の脱盟した前後の事情のあまりによく自分が兄から言われた言葉に似ていることだけが分っていた。そして、自分が郡兵衛の立場に置かれたらどうするだろうと、そればかり考えていた。その晩横になってからも、小平太はやっぱり中村鈴田兩人のことが気になって、どうしても寝つかれなかった。中田理平次一人の時は、まだしも考えなおした。が、その後からまた二人の反逆者が出た。しかも、自分が朝夕顔を合せていた者の中から出た。彼は考えこまずにはいられなかった。

「二人はさんざ勘平から恥じしめられた。が、その代りに命を助かった。そうだ、恥を忍べば、まだ助かる道はあるのだ」

そう思って、小平太は自分ながらはつとした。武士が命を惜し

むの、卑怯者だのと言われたらそれまでだ。それが最後の宣告である。彼はまだそれを超越するほど頹廢たいはいてき的になつてもいなければ、またそれほど人として悪摺わるずれてもいなかった。

「そうだ、高田郡兵衛が最初の脱盟者になつて、俺が最後の脱盟者になる？ そんなことはありえない、断じてあつてはならない！」

彼は一晚中輾てんてんはんそく々反側して、やつと夜明け方にうとうととした。

九

師走しわすの二日には、深川八幡前の一旗亭きていに、頼母子講たのもしこうの取立てと称して、一同集合することになっていた。討入前の重大な会議のこととて、その日は安兵衛も、勘平も、小平太も打揃うちそろうて午過ぎから出かけた。

頭領大石内蔵助も定刻前から子息主税を連れて遣ってきた。そのかたわらには、吉田忠左衛門を始めとして、原総右衛門、小野寺十内、間瀬久太夫などの領袖連が坐流れた。で、一同の顔も揃って、いよいよ会議に入ろうとする段になっても、どうしたのやら、一足後れてすぐ後から来るはずになっていた小山田庄左衛門の姿が見えない。すでに同宿の者の中から二人まで裏切者を出していることとて、安兵衛も、勘平もしきりに気を揉もんだ。中にも

勘平は、自分が一走り行つて見てきよう、そこらにまごまごしていたら引ひつつか搦なんで連れてくるとまで言いだした。が、吉田忠左衛門はしずかにそれを制して、

「この場に莅のぞんで変心するような臆病者をむりに引張つてきてもしかたがない。ここに御出席の方々は、皆亡君のために一命を投げだしている者どもでござるぞ。その方々の手前もある。打捨うておきなされ」と、言葉鋭く言いきつた。勘平も理りの当然に服して、そのまま黙ひかつて控ひかえていた。

いよいよ起請文きしようもんの前書が読み上げられた。これは仇討の宣言綱領といったようなもので、次の四箇条からなりたつていた。いわく

一、冷光院殿御尊讐吉良上野介殿討取るべき志さいむらいこれ
 ある侍ども申合せ候ところ、この節におよび大臆病者どもそうろう変
かえ心退散仕候者撰み捨て、ただ今申合せ必死相極め候面々めんめんは、
 御靈魂御照覧遊さるべく候こと。

一、上野介殿御屋敷へ押込働の儀、功の浅深おしここれ有べから
しるあげず候。上野介殿印揚候者も、警固一通けいこの者も同前たるべく候。
しかれ然ば組くみ合働あわせ役好申すまじく候。もつとも先後あらしの争致すべ
 からず候。一味合体いちみがいかやうの働役に相あい当候とも、少しも
なんじゆう難なん涉じゆう申すまじきこと。

一、一味の各存寄申出られ候とも、自己の意趣おのおのをおの含申んじより
ふくみ妨候儀さまたげこれ有まじく候。誰にても理の当然に申合すべく候。兼て

不快の底意ありこれ有候とも、働の節互に助け合い急を見継ぎ、勝利まつたきの全もつぱらところを専らに相働べきこと。

一、上野介殿十分に討取候とも、銘めいめい々々一命の遁がるべき覚悟これなき上は、一同に申合せ、散ちりぢり々々まかりなりに罷成なり申まじく候。手負ておいの者これ有ありにおいては、互ひっかけに引懸助け合い、その場へ集申べきこと。右四箇条相あいそむき背候むきわば、この一大事成じようじゆかまつら就仕しず候。然しかればこの度退散の大臆病者と同前たるべく候こと。

この草案は吉田忠左衛門の手になつた。忠左衛門のほかには、原総右衛門一人それに参与したと言われる。で、それを一同に読み聞かせた上、異議がなければ、ただちに神文しんもんへ血を注いでもらいたいと言いだされた。もちろん、誰一人として異議のあろう

はずもなかつた。そこで大石内蔵助良雄から 同 苗 主税良金、
 原総右衛門元辰、吉田忠左衛門兼 亮かねすけ というように、 禄高ろくだかによ
 つて、順々に血判をすることになつた。

小平太は小山田庄左衛門が姿を見せないと知つた時から、ほと
 んど一語も口を利かなかつた。が、起請文きしようもんが自分の前へ廻され
 た時には、顫ふるえる手先を覚られまいと努めながら、それでも立派
 に毛利小平太元義と署名して、その下に小指の血を注いだ。そし
 て、それを次の勝田新左衛門に渡した。

こうして大石内蔵助以下寺坂吉右衛門にいたるまで四十八人の
 血判がすんだ時、さらに当夜の人々 心にんにん 得こころえ が議ふに附せられ
 た。これも忠左衛門の手になつたもので、当日定めついでの刻限が来た

ら、かねて申合せた三箇所へもの静かに集合すべきことという第一箇条を始めとして、敵の首を揚げた時は、骸は上衣に包んで泉岳寺に持参すること、子息の首は持参におよばず打捨てること、なお味方の手負いは肩に引懸け連れて退くことが肝要だが、歩行難なんじゆう 渋しぶの首尾になれば、是非ぜひにおよばず首を揚げて引取ること、そのほか合図の小笛、鉦どら、退のきぐち口のこと、引揚げ場所のこと、途中近所の屋敷から人数を繰りだした場合の挨拶、上杉家から追手がかかった時の懸引、なおまた討入って勝負のつかぬうちに御検使が出張になった場合、それに応ずる口上にいたるまで、すべて十二箇条にわたって残る限なく討入の手筈てははずを定めた上、最後に退口のことを念頭に置いては、かえって心臆するかもしれない、し

かし退いても一定助からぬ吾らの身である、申すに及ばぬ儀なれど、めいめい必死の覚悟にて粉骨碎身ふんこつさいしんすべきことと結んであつた。これには二三質問も出た。が、入念な忠左衛門の説明に、一同満足して、異議なくそれを承認した。

それから当夜の各自の扮装いでたち、討入の諸道具についても話があつた。これはそれまでにめいめいその準備したくをしていることではあるが、持合せのないもの、または当夜に限つて必要なもの、たとえば槍なぎなた、薙刀ほそびき、弓矢の類を始めとして、斧おのかすがい、鎚げんのう、玄能か、懸か矢げや、竹梯子たけばしご、細引ほそびき、龕灯がんどうちょうちん、提灯どら、鉦どらというようなものは、かねてその用意をして平間村に保管してあるから、明日、明後日両日の間に、それぞれ取寄せておいてもらいたい。ただしそんな

ことから事の破れになつてはならぬというので、人目に立たぬように、それに関与する人数から役割まで定めて、それぞれ言いわたされた。

こういう風に相談が多端たたんに互わたつたために、頼母子講たのもしこうは夜に入つてようやく散会となつた。散会となるや、安兵衛と勘平とは庄左衛門のことが気になるので、宙を飛ぶようにして林町の宿へ駆け戻つた。小平太もその後つに随ついて走つた。が、そんな時分に、駈落者がそこらにうろろしているはずもない。安兵衛は取散らした荷物の間に坐つて、机ひきだしの抽斗ひきだしを開けては、しきりに小首を傾げ始めた。

「何か見当りませぬか」

「ふむ、金子が少々足りないようだ。それに、拙者の小袖も見当らない」

「なに、金子？」と、勘平と小平太もあわてて駈け寄った。

「いや、御安心ください。大石殿からお預りして、おのおの方にお渡しするはずの金子は、別にしまっておいたからだいじょうぶでござる。ただ手前の小遣い銭が少々紛失いたしました」

「それはそれは」と、二人ともしばらく開いた口が塞がらなかった。

「それにしても」と、勘平はまた猛りたつた、「何という卑劣な所業でござりましょう。脱盟して吾々の顔を潰すさえあるに、

他人の金品まで盗んで逐電するとは！」

「いやなに」と、安兵衛はしずかに言った。「浪人すれば、永い間にはそんな気にもなりません。どうせ吾々を見限つて一列を脱けた人だ、追及するにも当るまい」

「じやと申して、吾々の面目にも——」

「だからまあ、金のことはあまり言わぬようにいたしたい。吾々にあつてもあまり役に立たぬもの、これから先生き延びる人にはなくてならぬものだからな。ははははは」

「そういえば、そんなものでもござろうか、あはははは」と、勘平もいっしょになつて笑つてしまった。

小平太は最初庄左衛門が脱盟したと知つた時、ほとんどその訳が分らなかつた。ああいう一徹な父親を持つてゐる上に、平生ひごろか

らずいぶん口幅つたいことも言っていた男が、この期ごに及んで逐電する！ 彼にはどうしてもありうべからざることのように思われた。が、その一面においては、どういうものか、先せんを越されたというような気もした。自分ではまだ遁とんぼう亡ぼうしようとも何とも思っていないかった。けれども、心のどこかで、やっぱりそういう気きのしたことだけは争まじわれない。そして、庄左衛門が満座の中で諸士しから罵倒ばとうされるのを聞いていた時、まあまあ自分でなくってよかつたというような安心を覚えた。しかるに、今宿へ戻かへって検しらべてみると、庄左衛門は他人の金品まで持ち逃げしている！ これは下司げすげろう下郎げろうの仕業しわざで、士しにあるまじきことだ。こうなると、小平せいや太ももう自分のことのような気はしなかつた。いくら勘平かんへいが罵倒

しても、他人のこととして平気で聞き流すことができた。そのために、彼はかえって救われたような気もした。

明くる朝安兵衛は、とにかくこのことはいちおう頭領にも届けておく必要があるというので、早朝から出かけて行つた。その後で小平太は、一人火鉢ひばちに向つて、ぼんやり考えこんでいた。隣の座敷では、勘平が何やらしきりに書状を認しためている。この間にひとつおしおの許ところへ行つてやろうか、あの女に逢うのももうこれがおしまいだなぞと考かえているうちに、隣の間から勘平が片手に書状を持って出てきて、

「ちよつと出かけるから留守を頼むよ」と言つた。

實際、中村、鈴木、小山田とだんだん同宿の者が減つてきては、

飯^{めしたき}焚の男を除けば、もう小平太のほかには留守をするものもなかった。小平太はまた先を越されたなと思ひながら、「よろしい！」と言つた。そして、「飛脚^きを頼みに行くのか」と訊いてみた。

「うむ、あんまり臆病者がたくさん出るので、心外でたまらぬから、いちいち筆^{ひつちゆう}誅を加えてやつた」と、勘平は問わず語り話した。（ついでながら、勘平のこの書状は、江戸における赤穂浪士の動静を知る貴重な材料として、今に伝わっている）「だが、戻路^{もどり}にはちよつとよそへ廻るつもりだから、少し晩^{おそ}くなるがいいか」

「ああ、ゆつくり行つておいで」

勘平はそのまま出て行つた。が、それと入れ違ひに、前に出た

安兵衛が戻ってきて、

「小平太どの、ひとつ平間村まで御足労を願いたい」と言いだした。

聞けば、この宿が当夜の集合所の一つになっている。それについて、昨夜の相談では、当夜の諸道具はめいめいの宿へ持ちこむことになっていたが、やはり一部分はここへ集めておいた方がよかろうということに模様が変ったので、御足労だが、これからすぐに取りに行ってきてもらいたい。もつとも、大石殿の若党室む井左六ろいが仲間どもを連れて先へ行っているから、それらのものを持たせて、貴公はただ宰領してきてもらえばいいというのだ。小平太は領承りょうしょうしてすぐに立ち上った。

平間村までは往復八里の道である。目黒から間道を脱けて行ったが、それでも帰路は夜かえりに入よった。小平太は亥いの刻前いにようよう戻いつてきて、自分で指図さしずをして、それぞれ片づけるものは片づけさせてしまった。もちろん、安兵衛や勘平も手伝てづった。で、いよいよ寝しんにつこうとした時、そばに寝いていた勘平が、

「おい、小山田の遁にげた原因わけが分わつたぞ」と、声こゑを潜ひそめてささやいた。

「ええ？」と、小平太は思わず振返かえった。「それはまたどうした
というのだ？」

「先せん達だつてからあの男は」と、勘平は蒲団ふとんの上うへに起きなおつたままつづけた。「よく湯島の伯母おばあの許ところへ行くといつては出かけたも

のだ。なに、それが伯母の家でも何でもない、天神下の湯女の宿
 だとは、俺もとうから見抜いていた。だが、なにも他人ひとの秘密を
 誣あはくでもなし、何人だれにもありがちのことだと大目に見ておいたが
 ね、今になってみると、それがこつちの手脱てぬかりだったよ。で、ま
 だそこらにまごまごしていたら、引捕まえて 糺きゆうめい 明めい してやろう
 と、今日出たついでに、そちらへ廻つてみた。なに、天神下の湯
 女の宿は三軒しかないからすぐ分つたがね。だが、行つてみて驚
 いたよ。庄左衛門の相手の女というのも、昨夜から姿を見せない
 というので、向うでも大騒さわぎをしているのだ。てつきり二人しめ 謀め し
 合せて 駈かけ 落おち したものに相違ないね。こうなると、どこまで下
 司し にできているか方途ほうず が知れない。俺もよけいな暇ひまつぶ 潰つぶ しをした

ようなものの、そんな奴かと思つたら、やつと諦めがついたよ」
「そうか！」と言つたまま、小平太は何とも返辞ができなかつた。ただもう自分が糺明を受けているような気がして、胸は早鐘を撞くように動悸を打つた。

「だが、女のために大儀を衍る」と、勘平はまたごろりと横になりながら言つた。「考えてみると、気の毒なものじゃね。こうしてだんだん粃と糠とが撰り分けられるんだよ」

「そうだ、粃と糠とが撰り分けられるのだ」と、小平太はようようそれだけ言つた。

勘平は言うだけ言うと言つたか、そのままやすやすと寝入りかけた。が、小平太はそうは行かなかつた。夜着の襟に手を

懸けたまま、長い間蒲団の上に起きて坐っていた。そして、口の中では、絶えず「粃と糠、粃と糠！」と呟つぶやいていた。

最初彼は相手が自分に当てつけるために、わざと庄左衛門の女の話を持ち出したのだと思つた。が、考えてみると、そんなはずはない。もしおしおのことを感じていたら、そんな遠廻しに持ちかけるようなことは言うまい。勘平はそんな男ではない！ で、おしおのことはまだ何人だれにも知られていない、それだけはたしかだ。が、それにしても、自分はもう二度とあの女に逢つてはならない。この間から四五日遠退いていたのを幸いに、このまま顔を見ないで行く！ 不人情かはしらぬが、それよりほかに俺の取るべき道はない。あの女も後でそれを聞いたら、俺のことをさのみ

悪くは思うまい。――

「そうだ、俺はもう断じて逢わないぞ」

そう心に誓った時、彼はやっと安心して横になった。そして、眼を瞑つぶつたまま、

「なに、俺はただ眼を瞑つて吉良邸へ飛びこみさえすればいいのだ」と呟いた。「その後は生きるも死ぬるも向う次第だ。お上かみでいいようにしてくださいさる！」

彼はいつになく晴れ晴れとした気持になった。それに昼間の労れもあつて、そのままぐっすり寝こんでしまった。

明くる朝眼を覚した時は、またいつもの小平太になっていた。けれども、昨夜立てた誓いを守つて、どこへも出まいと思つた。そうだ、俺はどこへも出なければいい。そして、安兵衛と勘平の後に喰つついてさえいれば間違ひはない、大義を衍あやまるような恐れは断じてない。そう思つて、彼は一日じゆう宿に引籠つていた。そして、その日は何事もなく過ぎた。

ところが、四日の朝になつて、思いも寄らぬ通知が頭領の手許から一般に達せられた。それは、来る六日には、將軍家がお側御そば用人松平右京太夫の邸へお成なりになる旨、不意に触れだされた。それによつて、吉良家でも当日の茶会を御遠慮申しあげること

なつたについては、五日の夜と極めた一条も自然延期せずばなるまい。いづれ後からまた委くわしいことは通達するが、それまではかまえて静穩にしているようにというのであつた。

小平太は張り詰めた気が一時に弛ゆるんで、妙にがっかりしてしまつた。彼には討入の日の延びたということがちつとも嬉しくなかつた。なるほど、五日の夜は延びた。ぼうつとして考えていると、何だか仇討というようなことは夢のように遠い空のかなたへ消えてしまつて、そんな日は永久に遣つてこないような気もしないではない。しかもその日は厳然としてあるのだ。それだけはけつして動かない。いつかはまた弛んだ気を引締めて、いったんほぐした覚悟をもう一度しなおして懸らなければならぬ。それが彼に

は辛かった。そんなことはとても自分の力には及ばないような氣もした。

彼はもうどうする氣もなかった。で、一日二日は宿に引籠ったまま、うつらうつらとしていたが、そのうちにまたおしおのことが想いだされた。そうだ、この可厭いやな氣持から免まぬかれるためには、やっぱりあの女に逢いに行くほかない。なに、庄左衛門は女のために大義あやまを衍あやまったかもしれないが、俺の怖ろしいものは別にある。それは自分の心だ！　こうして一人でくつくつ考えていたら、しまいにはどんなことをしでかすか分らない。そうだ、そんなよいいなことを考えないためにも、俺はまずあの女に逢わなければならぬ。そう思った時、彼はもう矢やも楯たてもたまらなくなつて、す

ぐに支度をして宿を飛びだした。

が、女の家近づいた時には、それでもまた勘平に言われた言葉が気になった。といって、そのまま引返す気にもなれないので、うじうじしながら、とうとう女の家のきぼの軒端をくぐってしまった。

女の方では、そんなこととは知らないから、久しく逢いに来てくれなかった恨みを言うことも忘れて、心しんから嬉しそうにしながら、

「久しく見えなんだのは、どこかお悪かったのか。そういえば、お顔の色もようない」と、心配そうに訊ねた。

「なに、そう気に懸けてくれるほどのことでもない」と、小平太は面倒臭そうに言った。彼にはもう当座の嘘を言うのが億おっくう劫くわうに

なっていた。といつて、ほんとう真実のことも言われなかった。

「だって、心配になりますわ」と、おしおもさすがに言い返した。
「見えると言つても見えもせず、たまたま来れば、いやな顔ばかりしていらつしやるんだものを」

「じゃ、来なければよかつたね」と小平太は氣短に言つた。

すると、女はすぐに氣を変えた。「わたしが悪うござんした。
お氣合ひの悪いところへよけいなことばかりお訊ねして、もう何にも申しますまい」

こう言つて、おしおは相手の氣を逸そらすように、ほかの事に話しを移した。「わたしもあなたの妻になる身で、あんな茶店に出
ていたとあつては、後々どんな障さわりになろうもしれない。幸い、

さる人のお世話で、今度松坂町のさる御大家の仕立物を一手で縫ひとてわせていただくことになりました。まあ、これを見てくださいます。今もこんなに来ていくらいだから、どうか、わたしのことは安心して——」

「なに松坂町？」と、小平太は思わず聞耳を立てた。「その御大家というのは、何という家だえ？」

「ええ、中島伊勢様とおっしゃる大奥お出入りの御鏡師ということでございますの」と言いながら、何と思つたか、おしおはきゆうに顔を赧あからめた。「何でもその嫁よめ御寮は、吉良様の御家老とやらから来ておいでじゃということでございますわ」

「ふむ、そうか」と、小平太は腕こまぬを拱いで考えこんだ。そういう

ことがあるとすれば、いつそこでこの女に大望を打明けて、その手蔓てづるで何事かを聞きだすようにしようかとも思つてみた。が、この間兄に言つてしくじつたことを思えば、迂濶うかつに打明ける氣にもなれなかつた。それに、相手は女のこと、どんなことから事の破れになろうもしれない。まあまあと思ひ返して、「そうか、主家を滅ぼした敵かたきの片割れに縁のある家の仕事をして、身過ぎをするのも時代時節、まあ何事も辛抱だね」と言つておいた。

その日宿へ歸つた時、小平太は勘平に向つて、今日中島伊勢の宅へ出入りをするお物師とちよつと知合になつたがと漏らしてみた。すると、相手は無性に喜んで、

「そいつはうまいことをした。中島伊勢に娘をくれた家老といえ

ば、やっぱり小林平八郎のことに相違ない。ちよつとそんな話を耳に挟んだこともある。ぜひそいつはもつと立ち入つて探たんざく索しろ」とすすめてくれた。

で、その明くる日からは、小平太も大びらで宿を出て、おしおを訪ねることができた。が、女の顔を見ると、別にそんなことも言いださなければ、女の方でも、その後中島伊勢のことはふつとり口にしなくなつた。ただ小平太はこうして毎日女の顔を見に行つた。

が、一方では、兄新左衛門のことも気にかかつていた。ああして一時をごまかしてきたもの、あれから一度も姿を見せないから、今ごろどんなに不安に思っているかしのれない。もつとも、兄の気

性としては、あれだけ言っておいたものを、自分に無断で、はやまつて一党に迷惑を懸けるようなことはすまい。なれど、長い間には、自身の不安から、何をしでかさないとも限らない。五日の討入が延びた時には、いつそ安兵衛に事情を打明けて、兄の前だけでも同盟を脱退したように繕つくろってもらおうかとも考えてみた。が、高田郡兵衛のことを思うと、うっかりしたことを言いだして、どんな疑いを同志から受けまいものでもない。それを思えば、どうしてもそんなことは言いだされなかつた。時には、打明けた方が疑いを除くゆえんだとも思わないではなかつたが、やっぱり何物かがあつて彼を引留めた。で、とつおいつ思案している間に、とうとう言いだす機会を失つてしまった。

ただ彼は自分の住所を兄に知られていた。そのうちには、向うから訪ねてくるかもしれない。訪ねてこられたら一大事だ。彼は戸口に聞える足音にも胆きもを冷すようになった。よそから戻つてきても、まず留守中に誰も訪ねてこなかったと知るまでは安心ができなかつた。

そんな不安な日を送っているうちにも、日数は経つて、師走しわすの十一日になつた。この日同志の一人大高源吾はふたたび宗匠山田宗徧ところの許から、来るきた十四日いよいよ上野介の自邸において納めの茶会もよおが催される、その後は年内に白金の上杉家の別墅べつしよへ移られるはずだということまで聞きだしてきた。こうなればもう猶予ゆうよはできない。それに十四日は先君せんくんの御命日でもあるから、その日

を期して決行しようとして、即座に一決して、頭領大石内蔵助からそれぞれ一党に通つうだつ達された。

小平太はまた黙りこんでしまった。何だか非常に遠い所にあるように思っていた黒雲が、きゆうに目の前へ覆おおい被かぶさつてきたのである。が、安兵衛も勘平も冷静にその通告を受けて、もうするだけの用意はしてしまった、いつでも来いと言わんばかりに落着きすましている。二人の前へ対しても、小平太は自分の落着きのないのが恥ずかしかった。どうかしてそれを覚られないように落着いていようと思うけれど、二人と顔を合せていると、何となく心の底まで見透されるような気がしてたまらない。それでも、その明くる日いっぱいには、じつと辛抱して宿に残っていた。が、夕

方になると、もうたまらなくなつて、兄の許へ母親に逢いに行くという口^{こうじつ}実^{もと}の下に、ぶらりと家を出てしまった。もちろん、兄の許へなぞ行く気はなかつた。こうなればもう行く必要もなし、また事実行かれもしなかつた。彼の行かれる所としては、天上天下、ただおしおの家だけであつた。

彼は途を歩きながらも、「何のためにあの女に逢いに行く？」と考へてみずにはいられなかつた。「俺はいつたいあの女をどうしようと思つているのだ？」それには彼も自分ながら返辭ができなかつた。

「可哀そうに」と、しばらくして彼はまた考へつづけた、「あの女も今に及んで俺がどんな心を抱いて、どんな苦しみを嘗^なめてい

るか、まるで知らないでいるのだ！　こんな便りない男を手頼りに生きてきて、その男さえこの世にいなくなったら、これから先どうして生きて行くだろう？　考えてみれば、まったく不仕合せの女には相違ない！」

ふと、「あの女を殺したら？」というような気が心のどこかでした。「そうだ、いつそのこと、あの女を手懸けて殺したら、俺も本気で死ぬ決心がつくかもしれない」

が、そう思うと同時に、彼は自分でも自分の残忍な心に吃驚したように飛び上った。これまで自分の本心を明さないで、始終欺き通しに欺いてきた上に、最後に自分が死の覚悟をする手段として、相手の女を手懸けようとする？　俺の心は鬼か蛇か。ま

まったく自分ながら愛憎あいその尽きた男だ！

彼は眼を瞑つぶつてその心を払い退けようとした。いつそのまま女の顔を見ないで引返してしまおうかとも思ってみた。が、そう思っただけで、足はやっぱり向いた方へ歩いて、だんだん女の家に近づいていた。

何も知らないおしおは、例によつて愛想よく男を迎えた。

「今夜は少しゆつくりしてもいいように、同宿の者へも頼んできた。晩おそくなつたら、ここで泊つてもいいのだ。これでひとつお酒を購とつてきてくれ」と、小平太は懐かい中ちゆうから小粒を一つ出して渡した。

「まあ珍らしい、お酒を召しあがる？」と、おしおは可訝けげんそうに

相手の顔を見返したが、「でも、ゆつくりしていいとおっしゃるのうれは嬉しい。わたしもじつはこの間から聞いていただきたいと思つて、いることもある。では、すぐに行つて参さんじましょ」と、いそいそとして出て行つた。

ものの十分とは経たたないうちに、おしおは五合徳利に風呂敷に包んだ皿を提さげて戻つてきた。そして、しばらく台所でこそこそ遣つていたが、間もなく膳こたつの上に肴さかなと銚子とを揃えて持ちだした。小平太も火燧こたつから這はいだして、膳に向つたが、さされるままに一つ二つと盃さかずきを重ねた。日ごろは三杯と飲まぬうちにもう真赧まつかになつてしまふのだが、今夜はどうしたのやらいくら飲んでも酔いを発しない。薬でも呑むようにぐつと呑み乾しては、そのまままた

猪口ちよこを差出すので、

「まあ、そんなに召しあがつてようござりますか」と、おしおは注ぎかけた銚子ひかを控えて、思わず窘たしなめるように言った。

「なに、かまわぬ、注いでくれ」と、小平太は持った盃さかずきを突きつけるようにした。

「まあ、泊つて行つてもよいとおつしやるなら、少しはお酔いになつてもよかろ」と、おしおは思いなおしたように、またなみなみと注いだ。

小平太はその盃にちよつと唇をつけたまま、下に置いて、

「さつき言った、わしに話したいというのは、そりや何だ？」と、不意に言いだした。

「ええ」と、おしおはみるみる顔を赧あからめながら、「そりやまあ後でもいいことじゃわいな」と、その場をまぎらそうとした。

「そうか」と、小平太はまた盃を口へ持つて行つた。「言いたくなければ聞かんでもいい」

男の顔は蒼味あおみを帯びて、調子は妙もつに纏れかかつていた。

「いいえ、言いたくないことはない。どうしても聞いてもらわにやならぬことだけれど……」

「じゃ、言つたらどうだ？」

「ええ、あのそれは」と、おしおは口籠くちごもりながらつづけた。

「いつぞやから、今度逢つたら言おう言おうと思つていましたが、何だかまたよけいな御心配をかけるような気もして……じつは前

の月からわたし見るものを見ませんの」

「え？」と、小平太はぎくりとしたように言った。「ではあの、

お前が妊にんしん娠した？」

おしおは黙つてうなずいてみせた。

「そうか！」と、彼は太い息を吐ついた。

「でも、まだよくは分りませんのよ」と、おしおは相手の顔色を見て、すぐに言いなおしにかかった。「ただわたしがそう思っただけ……そんなにお気に懸けるのなら、申しあげなければようござんしたのになえ」

「なに、言つてくれた方がいいんだ」と、小平太は下を向いたまま言った。

「だって心配そうにしていらつしやるんだものを」

「気に懸けんでもいい。子どもが生れるとなれば、俺もいつそう気が締るといふものだ。とにかく、お前にこの上の苦労はさせんから、心配するな。それよりも一杯注いでくれ！」と、また盃を突き出した。

おしおはちよつと相手の顔を見返したまま、黙ってその盃を充みたした。

「心配せんでもいいぞ」と、小平太はまた繰返した。「日ごろ言つたわしの言葉に間違いはないからな。それに間違いさえなけりや、お前が気を揉もむことはあるまい」

「ええ、それはもうそうに違いございませぬけれど……」

「それならもつと注いでくれ、わしは今夜久しぶりに酔つてみたいのだ」

こう言つて、小平太はおしおに酌しやくをさせては、ぐいぐいと飲み干した。そして、一本の銚子が空になると、また二本目までつけさせた。が、二本目を飲みきらないうちに、苦しくなつて、そこに倒れてしまった。そして、横になつたまま、苦しそうに胸を波打たせていた。おしおは氣を揉んで、枕を当てがったり、頭を水で冷したり、いろいろ手を尽して介抱してくれた。それまでは覚えていたが、そのうちに少し胸むな先が樂やすきになつたと思つたら、いつの間にかうとうとと寝入つてしまった。

夜半よなかに咽喉のどが煎いりつくような氣がして、小平太は眼を覺した。

気がついてみると、自分はちやんと蒲団の上に夜着を被^かけて寝ていた。枕頭には古びた角^{かく}行^{あん}灯^{どん}がとぼれて、その下の盆の上には、酔いざめの水のつもりであろう、土瓶^{どびん}に湯呑まで添えておいてあった。彼はいきなり片手を伸ばして、それを引寄せようとしたが、ふと自分と床を並べて寝ているおしおの姿が眼にとまった。

「そうだ、俺はおしおの家に寝ているのだ！」

彼はぎよつとしたようにその手を引っこませた。それにしても、もう何^{なんど}時^じだろう？ 晩^{おそ}くなるとは言ってきたが、今夜自分が帰らないのを見たら、俺まで庄左衛門の二の舞いをしたものと極めて、横川がまたいつものように腹を立てていはせぬか。まあ、それは言い解^とく術^{すべ}もあろうし、明日の朝早く顔を見せさえすれば、

それですむ。すまぬは宵よいにおしおから聞いた話だ。もしあの話が
真ほんとう実だとすれば、俺はどうしたらいいか。肚はらの子に惹ひかれて、
このままここに居坐りでもしたら、それこそ庄左衛門と選ぶとこ
ろはない。俺も小山田といっしょにだけはなりたくない！

「いっつそのこの女を手懸けたら！」と、途中で考えたことがふた
たび彼の心よみがえに甦よみがえってきた。「そうだ、ここまで追詰められては、
俺もこの女を道みちづれ伴侶にするほかに救われる道はない。不便ふびんながら
も、お前の命は貰ったぞ！ 何事もお主しゆうのためと観念して、一足
先に行つてくれい。それがお前にとつても一番いい道かもしれな
い、その肚はらに宿ったという不幸な子どものためにも！」

彼は頭だけ持上げて、そつと隣の寢床を見遣った。おしおは尋

常に枕をしたまま、こちらを向いてすやすや寝入っている。その整った安らかな寝息が、いかにも男に信頼して、身も心も任せきっているように見えていじらしい。

「何も知らずに寝ているなあ！」

こう彼は呟いたまま、しばらく女の寝顔に見^み惚^とれていたが、何と思つたかきゆうに首を縮めて、またすつぽり夜着を引^ひ被^かつてしまつた。彼にはこの女を手懸けるなぞということではできそうにもなかつた。が、できなければどうしようというのだ？　もう一日経てば、否でも応でも白刃^{しろは}と白刃と打合う中へ飛びこまなければならぬ身ではないか。こんなことではならぬならぬと思ひながら、思えば思うほど腕^なが萎^なえるような気がして、どうにもなら

ない。彼はただ暗がりの中にまじまじと眼を睜みひらいていた。

そのうちにどこかで一いちばんどり番鶏が鳴いた。

「もう夜が明けるのかしら？」

彼は夜着をはぐつてもう一度顔を出した。が、宵よいまどいした鶏とりでもあつたか、つづいて啼なく鳥の声も聞えなかつた。

「そうだ、今のうちに決行しなければ、俺はいよいよ不義者になつてしまふのだ！」

彼は一思いにがばと跳はね起きて、いきなり壁ぎわに寄せておいた小刀を取るなり、すらりとその鞆さやを払った。そして、行あんどん灯とんの灯影ほかげに曇りのないその刀身を透してみた。新刀ながら最近とぎし研師とぎしの切きつ尖さきから今にも生血なまち

が滴りしたたそうな気がして、われにもなく持っている手がぶるぶると顫ふるえた。

「あなた、お目覚めになりましたか」と、不意に背後からおしおが声を懸けた。

小平太はぎくりとして、思わず振返った。そのはずみに、手に持った白刃がぎりりと闇に光った。それが眼に入ったのか、

「まあ、あなた！」と言ったまま、おしおはいきなり飛び起きてしまった。そして、

「あなた、どうなされました？ 気でも狂ったのか、そんなものを手に持って！」と、やにわに男の腕すだに縋りついた。

「うむ、待て、危殆あぶない！ 待てと言ったら待て！」と、小平太は

狼狽^{うろた}えながら、その手を振り放そうとした。

「いえいえ放しませぬ、訳を話してくださいさらぬうちは、けっしてこの手を放すことではござりませぬ」と、女はいよいよ力を籠^こめて、一心に武者振^{むしやぶ}りついた。

「話す話す、訳を言うからその手を放してくれ」と、小平太はようよう女の手をほどいて、刀を鞘^{さや}に納めた。

「さ、早う言ってくださいませ」と、女はその刀を取って自分の背後^{うしろ}へ片づけてから、男の前に膝をすすめた。「わたしというものもある身で、短気な心を出さんしたその訳を、有^{あり}様に言つて聞かせてくださいませ」

「話すと言った上は、そう言わんでも、きつと話して聞かせる」

と、小平太も蒲団の上に坐りなおした。「だが、どんなことを聞こうとも、かならず吃驚びつくりして騒ぐまいぞ」

おしおは黙つてうなずいてみせた。

「今まで隠しておいたは、なるほどわしが悪かった。とうに打明けようとも思ったが、それもならず、いわばわしは最初からそなたを瞞だましていたようなものじゃ。ま、せいてくれるな。よくしまいまで聞いてから、そなたの存分にしてくれたがいい、じつは去年三月のことがあつて、一家中残らず浪人してちりぢりばらばらになったとはいふものの、相手の吉良家はあのとおり何のおかまいなし、このまま御主君の妄もうしゆう執も晴らさずにおいては、家中の者の一分いちぶん立たずと、御城代大石内蔵助様始め、志ある方々が

集まって、寄り寄り仇討の相談をなされた。その連名の中へ、わしも去年の暮から加わったのじや」

おしおは眼を睜みはつたまま、目じろぎもせず男の顔を見詰めていた。

「林町に家を借りて、堀部安兵衛どのそのほかの方々と同宿しているのも、じつを言えば仇家きゆうかの動静を窺うかがうためにほかならない。

同志の方々はそれぞれ仲間小者、ないし小商人に身を落して、艱か難なん辛苦しんくをされるのも皆お主しゆうのためだ。わしもその中に交つて及

ばずながら働いているうちに、天神の茶店でそなたに出逢つたのがわしの因果いんが、大事を抱えた身と知りながら、それを隠して、ついそなたと悪縁を結んでしまった。ああとんだことをしたと思つ

た時は、もう晩い^{おそ}。どうせ末遂^{すえと}げぬ縁と知りながら、これまで隠していたのは重々そなたに申訳ないが、これも前世の約束事と、どうか諦めてもらいたい」

「いえいえ、それをおっしゃってくださいるにはおよびませぬ」と、おしおは顔に袂^{たもと}を押当てたまま、おろおろ泣きだしてしまった。

「そんな深いお心があるとも知らず、これまでいつしよになれの引取ってくれのと、女気の一筋に、おせがみ申したのが恥ずかしい。どうぞ、どうぞその後を聞かせてくださいませ」

「最初に嘘を言ったのがわしの因果^{いんが}」と、小平太も顔を背向けながらつぶけた。「その後は打明けるにも明けられず、悪いとは知りながら、だんだん悪縁を重ねているうちに、いよいよ吉良邸へ

乗りこむ日が来てしまった」

「え、それはいつのことでござんすえ？」と、おしおは思わず顔を上げた。

「来る十四日、明くればもう明日の夜に迫っているのだ」

「それでは明日の晩吉良邸へ乗りこんだら、あなたはもうそれぎりお帰りにはなれませぬか」

「うむ、一党残らず死ぬ覚悟で乗りこむのだ。たといその場で討死せいでも、天下の御法ごほうに背そむいて高家へ斬りこむ以上、しよせん生きては還かえられぬ。だがな」と、小平太はきゆうに声を落してささやいた、「そなたの思わくも面目ないが、どうもわしは未練があつて、この期ごに及んでまだ死ぬ決心がつかぬ。わしの死んだ後

で、お前がどうして暮すだろう、どうしてその日を送るだろうと
思うと、いくら考えなおしてみても、そなたを一人残してはどう
も死にきれない。で、すまぬことじゃが、お主しゆうのためには代えら
れぬ、いつそお前を手に懸けて——」

「ええッ！」

「お前は思い違いをしたようじゃが、いつそお前を手に懸けてお
いて、その足でお供ともに立とうと、寝ているのを幸い、そつと刀に
手を懸けたところをお前に眼を覚されたのじゃ」

「まあ！」と言ったまま、おしおは俯向うつむいて考えこんでしまった。
が、ややあつて、思い入ったようにむつくり顔を上げた。「あな
たのお心はよう分りました。だが、なぜそうならそうと訳を聞か

せておいてから、手に懸けようとははしてくださらぬ。身分こそ卑しけれ、わたしも浅野家の禄を喰んだものの娘でござんす。父はあのとおりの病身な上に、そんな企てが皆様方のうちにあるとも知らず死んで行きました。私どもは女子のこと、そんな話を聞かしてくる人もなければ、知りもせず、これまでは夢中で暮してきたようなものの、知らぬうちはともあれ、この上はあなたのお邪魔になつてはすみませぬ。わたしは覚悟を極めました！」

「なに、覚悟を極めたとは？」と、小平太はうろたえ気味に聞き返した。

「はい、どうせあなたと別れては、誰一人たよるものもないわたしの身、後に残つて、一人で生きて行こうとは思ひませぬ。どう

ぞわたしを手に懸けておいて、いさぎ潔よう かたきうち敵討のお供をしてくださいませ」

こう言つて、おしおは男の前へ身体を突きつけるようにした。

「さ、その刀で一思いに殺してくださいませ。それほどわたしの身を思うてくださるあなたのお手に懸つて死ぬのは、わたしも本望でござんすわいな」

「ま、待て、待てと言つたら、少し待つてくれ！」と、小平太はすっかり周章あわててしまった。「そういちがいに言われても、わたしにはお前を手に懸けることはできそうもないわい」

「え、何と言わしやんす？ そんならわたしゆえに未練が出るから殺しに来たとおっしゃったは、ありやお前本気ではござりませ

ぬかえ」

「いいや、本氣じゃ、本氣には相違ないが、殺せと言われて、現在かわいい女房、それも肚に子さえ宿ったというものを、そうやみやみと手に懸けられるものでない。ううむ、待て、わしは一人で行くと覚悟をした！ お前はどうか後に残って、氣の毒じゃが、その子を育てて行つてくれ」

子どものことを言われて、おしおは思わず帯のところへ手を遣つて、じつと頸垂れたまま考えこんでしまった。

「それにわしの死んだ後で、たとい忠義の士よ、お主しゆうのために命を捨てた侍さむらいよと、世に持もて嘯はやされる身になつても、わしの身寄りの者が誰一人それを聞いていてくれるものがないかと思えば、何

となくうら淋しい気もする。なに、わしの兄はあつても、あれはもうわしの身寄りではない。身寄りといつては、お前一人だ。そのお前が後に残つて、忠義の侍よ、あれを見よと、わしが世間から囃されるのを聞いていてくれたら、同じ死ぬにも張合があるというもの。わしは思いなおした。どうかわしの言うことを聞いて、後に生き残つてくれ！」

おしおはやつぱり俯向いたまま、何とも言わなかつた。小平太は氣を揉もんで、

「な、わしの言うことは分つたらうな？ 分つたら、どうか得とく心んして、わしの言うことを諾きいてくれ、な、な！」と、女の背に手を懸けながら繰返した。

「そうあなたのお覚悟がつけば」と、おしおはようよう顔を上げた。「なるほど、わたしは後に残つて、あなたの武名が上るのを蔭ながら見させていただきましょう。まだ海のものとも山のものとも分りませぬが、もしお肚の嬰兒ややが無事に生れましたら、立派にあなたの跡目あとめを立たせます。どうぞそれだけは安心して、後へ心を残さぬように、屑いさぎようお主の敵を討つてくださりませ」

「そうか、それでやつとわしも安心した」と、小平太は本当に安心したように言った。「なに、妻子を後に残して行くものは、わしばかりではない、同志の中にはいくらもある。わしだけが妻子に心を惹ひかされたとあつては、同志の前へも面目ない。ただお前をこれまで内密ないしよにしておいたのが気の毒じやが、なに、それも

わしは決心した。明日にもお頭大石内蔵助様のお目にかかつて、お前のことを包まず申しあげておくつもりだ。そうすれば、お前は天下晴れてわしの女房、誰に遠慮も気兼ねもないというものだからね。ただどうもこれまで一同の前へ包んでおいたのがようないが、なに、こうなれば、そんなことに遠慮も要るまい。わしはそうすることに決心したよ」

「そうしてくだされば、わたしもどんなに嬉しいかしれませぬ」と、おしおも心しんから嬉しそうになっこりした。

こうして二人は夜の明けるまで互に尽きぬ思いを語り明した。

そして、夜の白々明けを待つて、「もう二度とは顔を見せないぞ」と言いおいたまま、小平太は思いきつて、袂たもとを振りきるように、

その長屋を出てしまった。

十一

小平太が林町の宿へ帰ってきた時は、まだ夜が明け放れたばかりであつた。勘平は一人起きだして、雨戸を繰っていた。そして、小平太の顔を見ると、

「おお毛利か、帰つてきたな」と、いつものように声を懸けた。

「いや、昨夜は御心配をかけてすまなかつた」

「なに、別段心配はせんがね、ただ時日が迫っているので、何かまた異変でも生じた時、君が居合せないために、後で臍ほぞを噛むよ

うなことがあつてはならぬと、ただそれだけを案じたよ」

「ありがとう、母がまた癩しやくを起してね、まあ、これが最後だと思つて、宵終よっぴてついていて看護してきたよ」

「で、別にたいしたことはないのか」

「いや、いつもの持病だ。気がかりなことはないさ」と言いながら、小平太は極きまりの悪そうに、こそこそ自分の居間へはいった。

同志から疑いの眼で見られるのも辛い、それよりも、この期ごに及んでなおその前を繕つくろうために、同志を欺あざむかねばならぬということが、小平太にはいかにも心苦しかった。そうだ、これはどう

しても頭領に届けでるほかはない。一刻も早く届け出でて、その御裁可ごさいかを得ておく。もつとも、こんなことまで太夫たゆうの耳に入れる

のは、いかがとも思われたいではないが、たとい女には関係しても、小山田などと一つでない証拠を見せるためには、思いきつて何もかも白状してしまうほかない。そうすれば、俺もいよいよ後へは退かれなくなる道理だ！ ただこんなことを太夫に申入れるには、誰か人をもつてするのが本当かもしれないが、差当つてそれを打明けるのに恰かっこう好な相手も同志の中には見当らない。なにかまうものか、場合が場合だ、面押つらおしぬぐ拭つて自分で申しあげることにしてしよう。そう決心するとともに、彼はその日の昼過ぎから、ちよつと石こくちよう町しんちようまで伺候してくると同宿の二人に断つて、ぶらりと表へ出た。

急ぎ足に小山屋の隠宅まで来てみると、頭領大石は今国元へ送

る書面を認めていられるというので、すぐには面会ができなかつた。同じ宿に泊っている潮田又之丞、近松勘六、菅谷半之丞、早水藤左衛門なぞという連中は、一室置いた次の間に集まって、^{はやみ}上の間に気を兼ねながらも、何やらおもしろそうに談話をしてい^{かみ}た。時にはわれを忘れて大きな声も出した。小平太はその中に加わったようなものの、ほかの連中は皆百五十石、二百石取りの上^じ土ばかりで、三村次郎左衛門を除いては、元の身分が違うから、^{ようし}何となく話しもそぐわないような気がして、黙って隅の方に控^{ひか}えていた。同志は「もつとこちらへ出られよ」と勧めてくれたが、遠慮してそばへ寄らなかつた。次郎左衛門はもともと土分とも言われぬ小身ものだけに、自分もそのつもりで、始終起つたり坐つ

たりしながら、忠実まめに一同の用を達していた。

内蔵助の書いている書面というのは、赤穂の元浅野家菩提所ぼだいしよ華岳寺の住職惠光えいこう、同新浜正福寺の住職良雪、自家の菩提所周世すせ村の神護寺住職三人に宛あてたもので、自分が江戸へ下つてからの一党の情況を報じて、いよいよ一挙の日も迫つたことを告げた上、「このたび申合せ候者そうもものども四十八人にて、斯様かように志を合せ申す儀も、冷光院殿この上の御外聞と存ずることに候。死後御見分のたぬ遺しおき候口上書一通写し進じ候。いずれも忠信の者そうろうどもに候間あいだごえこう、御回向をも成下なされさるべく候。その場に生残り候者ども、さだめて引出され御尋ね御仕置にも仰附おおせつけらるべく、もちろんその段人んにん々々覚悟の事に候。御心易かるべく候云々」と書いてあつた。死

後御檢分のため遺しおく口上書とは、二日に深川八幡前で認めた
 仇討あだうちの宣言書と起請文きしょうもんのことで、その中には毛利小平太の名
 も歴然として記載されてあるこというまでもない。なお内蔵助は
 それについて、己おのが妻子のことにも言い及んで、

「はたまた拙者妻こと、京より離別つかまつ仕り縁者方へ返し申候。倅、
 娘儀いかように罷成まかりなり候ともそれまでの事に候」といい、さらに
 平常方外の友として、その啓沃けいよくを受けた良雪に對しては、

「良雪様、去年以来の御物語、失念つかまつ仕らず、日々存じ出し、この
 たび当然の覚悟に罷成まかりなりかたじけなき次第に御座候。日ごろ御心
 易く御意を得候えうろう各々様ゆえ、別して御残多く、御暇乞かたがたか

くのごとく御座候、恐惶謹言」と結んでいる。で、それを書いてしまふと、若党室井左六、加瀬村幸七の兩人をそばへ喚よんだ。かねてその旨吩咐いいつけられていたので、兩人とも旅支度をして脚絆きやはんまで穿はいていたこととて、その書状を受取るなり、一同に暇乞いとまごいして、涙を拭き拭き出て行つた。

で、この隙間ひまに太夫に会つてと、小平太は腰まで上げたが、吉田忠左衛門が来て、何やら太夫と打合せをしていると聞いて、またその腰を卸おろしてしまつた。そして、ふたたび黙つて諸士の話しに耳を傾けた。

「今ごろから出かけて、あの二人は日のあるうちにどこまで延しますかな」と、一人が言つた。

「さ、脚の早い者として、六郷までは参りましようか。今夜は川崎泊りですよ」

「日の短いごろですからな」と、また一人がそれに応えた。「それにしても、あの主思いな二人の忠節といい、それを出してやられる太夫のお心のうち、昔の鬼王、童三どうざが古事ふるごとも想いだされて、拙者は思わず貰い泣きをしました」

「さようさよう。同じ大石殿の家来ちゆうの中にも、瀬尾孫左衛門のような人にんびにん非人ひにんもあれば、またあんな忠義なものもある。まさかの場合になつて、始めて人の心は分るものでござるな」

こんな話を聞いていると、小平太には、せつかく太夫に聞いてもらおうとした自分の用事が取るに足りないばかりでなく、何

だが滑稽こっけいのようにも思われてきた。自分としては一生懸命だが、人が聞けば、何と申つて今ごろそんなことを言いだすかと、頭から一笑に附つせられるかもしれない。そう思うと、彼は自分が何のために遣つてきて、何のためにこうして待つているのか分らなくなつた。それに、忠左衛門の用談はよほど大切なことと見えて、いつまで待つても果てそうにない。彼はだんだん尻をもじもじし始めた。

「時に太夫は京師けいしを出発される前に妻子を離別してこられたと承うけたまわるが」と、一人がまた言いだした。「後のち々のことを思えば、それも分別あるしかたと申すもの、近松どの、貴殿はいかがなされた？」

「妻子のことはほとんど忘れてい申した」と、勘六はむつつり口を開いた。「なに、なるようになる分のこと、そこまでは考えていられませぬわい」

「拙者は離縁状だけは渡してまいりました。しかし相続人としてはなし、渡さぬからとて、女子どもにはお咎めとがもござりますまい」

「拙者も御同様」

「拙者も……」

が、こんな話しになると、さすが死を決した面々もだんだん愠うら鬱うになって、しまいには皆黙もくつてしまった。聞いている小平太には、いよいよ自分の用事が滑稽こっけいに見えてきた。

「他人は皆、ある妻子まで離別して、出かけてきている。それだ

のいしよに、自分は今生死の境に立つて、新あらたに妻を迎えたなと、それも内密こしらで、拵いしよえたなと、そんなことがどうしてお頭の耳に入れられよう？ ばかな！」

そう思うとともに、きゆうに身みづくろ繕くろいして、

「誠に長座をして失礼いたしました」と、諸士に一礼して立ち上った。

「おお小平太どの、お帰りか。何か太夫に火急な用事でもあつたのではござらぬか。お急ぎなら、吾々からお取次ぎいたそうかと、口々に言つてくれた。が、そんな明らさまに、他人に言われるような用事ではない。

「いや、ありがとうはござりますが、さしたることでござりま

せぬ。おりもあらば、また重ねて参上しまして」と言い捨てたまま、そこそこにその隠宅を出てしまった。

彼は真直に林町の宿へ戻つてきた。そして、一間ひとまに閉じ籠つたまま、誰とも顔を合せないようにしていた。彼としては、何よりもおしおにした約束を果さなかつたことが氣に懸つた。こうなれば、あの女はもう自分の死後も自分の妻と名告なることはできない。妻も子も永遠に日蔭の身である。もつとも、同志の士は皆妻子を離別してきたというが、それとこれとは話が違ふ。あの女は一生おの己れを扶助ふじよしてくれるはずの良人を失つた上に、しかもその良人を誰と名指すこともできない。そして、その名指されぬ良人の子をかよわ纖弱い女手一つで育てて行かなければならない——これから先

永い永い一生の間！ あの女としては、そんな思いをして生きて行くよりも、自分の妻として、公然お上のお咎とがめに逢いたかつたかもしれない。お咎めに逢つて、もしお仕置しおきになるものならなつて死にたかつたかもしれない。それを知りながら、せつかく石こくち町ようまで出かけて行つて、何にも言わずに還つてきた自分はいつたいどうしたというのだろうか？

「どうかしたら」と、彼はまた一人で考えつづけた、「俺は太夫にそんな内情まで打明けるが恐ろしかったのではないか。そんな内情まで打明ければ、俺は義理にも太夫に背そむくことができなくなる。もちろん、俺は太夫を裏切るような気はない。気はないが、なおそこに一分の余裕を存ぞんしておくために、わざと太夫に逢わず

に帰つてきたのではあるまいか。考えてみれば、兄新左衛門のいきさつを同宿の安兵衛に打明けようとして、とうとう打明けずじまつたのもそれだ。打明けずにさえおけば、いつでも兄とした約束を真ほんとう実にすることができるといふゆとりがある。不埒ふらちでも、狡猾ずるいでもない、俺はただそのゆとりが欲しかったのだ。今日でももし太夫に会つて、いつぞやのような優しい言葉でも懸けられようものなら、俺はすぐにもこの人のために死にたくなる。それが怖ろしかったのだ！」

彼はもうそんな風にして自分の心を見詰めるに堪えられなかつた。で、夜はまだ早い、蒲団を敷いて一人でごろりと横になつた。が、どうしても瞼まぶた眼が合わないで、とうとうまんじりともせ

ずに一夜を明した。

十二

いよいよ十二月十四日、吉良邸討入の当日とはなつた。その日は朝から霏々ひひとして雪が降つていた。月こそ変れ、先君内匠頭の命日である上に、今こんじょう生の名残りというので、大石内蔵助を始め十余名の同志は、かねての牒しめしあわ合せに従つて、その日早く高輪泉岳寺にある先君の墓ほけつ礎に参拝した。堀部安兵衛も同宿の毛利小平太、横川勘平を代表して、その席つらに列なつた。で、ひととおり読経と焼しょうこう香こうがすんだ後、白銀三枚を包んで寺僧いたに致して、

一同別席でお齋とつきについた。それから暫時人払いをした上、その席上で内蔵助から最後の打合せがあつた。そして、後刻を約して散会になつた。

安兵衛は八つ前に宿へ戻つてきた。すぐに小平太と勘平の二人を前へ喚よんで、今日の次第を物語つた上、「討入の手配はかねて覚書によつてめいめいに伝えられたとおりでござる。一同は今夜丑うしの上刻までに、この宿と、本所三つ目杉野十兵次どのの借宅と、前原神崎両人の店と、この三箇所へ集合することになっている。なおわれら三人のうち、横川氏は大石殿の手に属して表門へかかり、拙者と小平太どのとは主税どのの手に属して裏門へ廻ることになつたから、その心得でいてもらいたい。で、それまでは格別

用事もござらぬによつて、用の残っている方は用達しに出られるのも御勝手だが、当家は一党の集合所になつてゐることでもあり、かたがた晩おそくとも子の刻ねまでにはここへ戻つてきているようにしてもらいたい。拙者はこれからこの旨を伝えるために、両国米沢町の養父の宅まで参るが、約束の刻限までにはかならず戻つてくるから」と言いおいたままふたたび出て行つた。

その後で、勘平と小平太とはしばらく顔を突合せていた。小平太には、何よりもこうして同志の者と向い合つて、落着かぬのに落着いた顔をしているのが辛かつた。時刻は一分いちぶきざ刻みに刻々と移つて行く。いつそ早く定めのの刻限が来てくれたらとも思つてみた。そうしたら、この苦しみから免のがれられるかもしれない。その

刻限が来るのは恐ろしい。しかしそれを待っているのはいつそう怖ろしい！ そんなことを考えているうちに、勘平は何と思つたのか、小平太に向つて、

「おい、今日はどうして出かけないのだ？」と言いだした。「俺はこちらに縁辺もなし、訪ねてやる知^{しり}人^{びと}とてもない。ま、留守は俺がしているから、今夜が最後だ、何^い方^{ずかた}へなりとも行つてこられい」

小平太はその言葉に救われたような気がした。で、考える間もなく、

「そうか。では、気の毒じやが、何^{なに}分^{ぶん}頼^{たの}むよ」と言つたまま、そわそわと宿を出てしまった。

が、出るには出ても、小平太には別段どこへ行く宛もなかった。おしおとはもう昨日の朝「二度とは会わんぞ！」と言いいおいて別れてきた。それに、あの女と交した約束も果さないで、今さら逢いに行かれるものでない。そうはいうものの、いつもの癖か、足はおのずと柳島の方角へ向いていた。が、気がつくとき、弾はじかれるように方向を転じて、わざと向島の土手へ出た。それから渡船とせんを待ち合せて、待乳山まつちやまの下へ渡った時は、もう日もとつぷりと暮れていた。彼は先を争って上る合客の後から、のっそり船着場を上って行きながら、何のためにこうして雪の降る中を宛もなしに歩いているのか、自分でもよく分らなかつた。

「そうだ」と、彼は河岸かしの上に立って、真黒な水おもての面を見返りな

がら考えた。「俺はまだ死ぬ覚悟がついていないのだ！ ついていなければこそ、こうして亡者のようにふらふら歩き廻っているのだ。だが、死ぬ覚悟をするために、俺はどれだけ苦しんできたろう？ なるほど、俺は命が惜しい！ 生れついでの卑怯者かもしれない。だが、命が惜しいからといって、俺はまだ一度も命を助かろうとしてもがいた覚えはない。ただどうしたら命が捨てられるか、安んじて死んで行かれるかと、ただそればかりを今日まで力めてきた。それがためには、俺はかわいい女房をも殺そうとした。兄に大事を打明けたのも、じつはそのためだ。それでいながら、俺にはまだ死ぬ覚悟がつかない——この期ごに及んで、この土壇場どたんばに莅のぞんで！ 俺はいつたいどうしたらいいのだ？」

どうしたらいいかは、彼にももちろん分ろうはずがなかった。彼はまたふらふらと歩きだした。

「ほかの連中は皆命を軽石ほどにも思っていないらしい。俺はどうしたらこの未練らしい執しゅうじやく着やくの根を絶つて、ああいう風になれるのだ？」

そう思いながら、彼はさすがに人通りの罕まれな日本堤の上を歩いていった。後から「ほい、ほいッ！」と威勢のいい懸声をしながら、桐油とうゆをかけた四つ手籠てしよが一丁そばを摺すり抜けて行く。吉原の情婦おんなにでも逢いに行く嫖客きやくを乗せて行くものらしい。が、彼はそんなことにも気がつかなかった。賑にぎやかな廓くわくの灯ひを横目に見ながら、そのまま暗い土手の上を歩きつづけた。そして、だんだん歩

いているうちに、とうとう坂本から上野の山下へ出てしまった。

山下へ出た時は、手も足も寒さに凍こごえて千断ちぎれそうな気がしたので、とある居酒屋が見つかったのを幸い、そつと暖簾のれんをくぐつた。あり合せの鍋物あつらを誂あつらえて、手酌てじやくでちびりちびり飲みだしたが、いつもの小量にも似ず、いくら飲んでも思うように酔わなかつた。それでも彼は、自分で自分を忘れようとしてもしているように、後いっときから後ちようしからと銚子ちようしを重ねた。

一刻いっときばかりして、彼がその居酒屋を出た時は、もう子の刻ねに近かつた。が、彼はすぐに両国の方へ引返そうとはしないで、何と思つたか、元来た坂本の道を真直に千住の大橋に向つて歩きだした。その時はもう雪も止んで、十四日の月が皎こうこう々として中ちゆう

天てんに懸かっていた。通りの町家は皆寝鎮ねしずまっていた。前を見ても後を見ても、人通りはない。自分では酔わぬつもりでも、脚はかなりふらふらしていた。彼はその千鳥足ちどりあしを踏み締めながら、狂き人ちがいのように、どンドン雪を蹴けって駈かけだした。

大橋の上まで来た時、小平太ははつとしたように吾に返った。

「いったい、俺はどこまで行く気だろう？ それよりも、今はもう何なんどき剋くだろう？」

彼は橋の上に立ち停とったまま、頭の上の北斗星を見遣みやった。

「そうだ、丑うしの上刻うし！ それまでに宿へ帰らなければ、もう間に合あわない！」

彼は背後うしろから鉞まさかりで殴打どやされたように躍おどり上あった。

「もう何剋だか知らないが、千住の大橋から兩國までは一里あまり、丑の刻までには行き着かれそうにもない。俺はどうとう時刻を逸した。俺は同盟から外れてしまった。俺は人外に墮ちた、蛆虫うじむし同様になつてしまった。もう明日から人にも顔は合わされない。同志は今ごろ俺を何と言つてるだろう、何と言つて罵つてのしいるだろう？ 安兵衛は？ 勘平は？」

彼はよろよろと橋の欄干てすりに凭れもたかかつて、両手に頭髪かみの毛を引ひつつか
掴つかんだまま、「そうだ、俺は時刻に後れると知りながら、わざと後れるようにしかけたのだ、わざとこんな所へ来てしまったのだ。何という俺は卑怯者だ、臆病者だ！ 生れついでついでの臆病が最後にとうとう俺に打克うちかつたのだ！」と呟つぶやいた。そして、そう呟つぶやき

ながら、だんだん雪の中に顔を埋めてしまった。

が、しばらくして、彼はまたむっくり顔を上げた。月は依然として照っていた。が、その月も彼の眼には入らなかつた。

「だが、俺はそんなに臆病者かしら？」と、彼はぼんやりあたりを見廻しながら呟いた。「俺はとにかく万死を冒して吉良邸へ入りこんだこともある。そして、当夜の一番槍にも優る功名ぞと、仲間の者から称美されるほどの手柄も立てた。しいて言えば、今夜の討入も俺の探索のおかげで極つたとも言われぬことはない。それほどの手柄を立てた俺が、こんなことになってしまった。一生世間へ顔出しもできない卑怯者になってしまった。なぜだ？なぜだか俺にも分らない！」

「いや、分らないことはない」と、彼は自分で自分に反抗するよ
うにつづけた。「俺にはちやんと分っている。なるほど、吉良邸
に入りこむということは、九死に一生の危険を冒したものかもし
れない。が、九死に一生でも、一生は一生だ。十が十の死ではな
い。そこに一つだけは、とにかく、生きられるかもしれないとい
う宛がある。俺はその一つを宛にして吉良邸に入りこんだのだ。

あの場合、俺はけっして本当に死ぬ覚悟なぞしてはいなかったの
だ。けれども、今夜吉良邸へ斬りこんだら、それこそ本当に十が
十の死だ！ 公儀の手に召捕られて、お仕置場へ引きだされたら、
どんなことがあつても免れようはない。牛や馬のように、首玉へ
縄を結えつけておいて、むぎむぎと屠られるのだ。それはあまり

に怖ろしい、あまりに人間性を蔑ろにしたものだ。そんな怖ろしい犠牲ぎせいを主君は家来に向つて要求することのできるものだろうか。家来に扶持ふちを与えておけば、その家来からそんな人間性を奪うような犠牲を要求してもいいのか。なに、殿の御馬前に討死せよというのなら、俺は立派に死んでみせる。けれども、けれども、今夜吉良邸へ討入ることだけは、俺にはできない、俺にはどうしてもできない！

「なに、ほかの連中は皆忠義の士と言われたさに、名という餌えせに釣られて、眼を瞑つぶつて死の関門へ飛びこもうとしているのだ。眼を瞑つて死の関門へ飛びこむことは易い。難かしいのは、それよりも死の関門に到るまでの道程だ。死の関門を正視しながら、眼

を開いてその中へ飛びこむだけの用意をすることだ。俺はこれまでそのためにあらゆる苦しみを嘗^なめてきた。死に到る道程の全部を歩いてきた。全部を経験してきた。それは同志の中の何人^{なんびと}も知らないような焦^{しょう}熱^{ねつ}地^じ獄^{じやく}の苦しみであつた。おお、俺はそれだけでも許さるべきではないか。他人は何とも言わば言え、俺は俺自身に対して言訳が立つのではあるまいか」

こう考えてきた時、彼にはそれが動かすべからざる真理のような気がして、やや落着いてきた。で、雪の積つた街路の上をじつと見詰めていたが、何と思つたか、またふらふらと立つて歩きだした。

「考えてみれば」と、彼はまた歩きながら眩^{つぶや}いた。「横川も言つ

たように、頭領大石が討入の日をこんなに延び延びにされたのもよくない。俺が死の苦しみを日々に嘗めてきたのも、そのためだ。最後にこんなことになってしまったのも、そのためだと言わば言われぬこともない！もし仇討あだうちがこの春決行されたら、百二十余名の同志があつたはずだ。七十名に余る落伍者らくごしやの中には、俺と同じように苦しんだものもあつたに相違ない。それをいちがいに不忠喚ふちゆうよばわりするのは当を得ない」

彼は在来の落伍者のためにも弁ぜずにはいられなかつた。が、その下から、在来の落伍者と自分とを同じように見るといふことが、何となく彼の反感を唆そそつた。

「だが」と、彼はまたすぐに考えなおさずにはいられなかつた、

「仇討の連盟が百二十余名に達した時、ただちにそれを決行したら、なるほど百二十余名の者が一列に死についたかもしれない。百二十余名は立派だが、その中にはまだ本当に死の覚悟のできていないものもあつたに相違ない。そういう生半可なまはんかのものを引連れて、吉良邸へ乗りこむということは仇討の美名もとの下に、一種の悪事を行うようなものではないか。死にたくないものを死なせる——というよりも、仇討に値いしないものを引率して仇討をするということが、悪事ではなくて何であろう！ よし吉良邸へ乗りこむことはできても、それでは御主君冷光院殿の前へは出られまい。そんな者の来ることを御主君は喜ばれないに相違ない。頭領はそこを考えていられた。いや、大石殿がそこまで意識していられた

かどうかは分らないが、故意にしても偶然にしても、とにかく仇討を延び延びにすることによつて、そういう生半可なものをすぐり落された、もみ 粃とぬか 糠とをえ 選り分けられた。つまり俺もその試練に堪えないでふる 篩い落されてしまったのだ。俺は糠であつた、これまでの落伍者と同じように糠にすぎなかつたのだ！」

彼はおしつぶ 押潰されたように、へたへたと雪の中に倒れてしまった。「そうだ、俺は糠だ、糠にすぎない！ 今夜討入つた同志がほん 真実の粃であつたのだ。あの連中だとして、俺のような苦しみを嘗なめなかつたとは、どうして言われよう？ 彼らはよくその試練に堪えて、自分が粃であることを立証したばかりだ。俺は生れながらにみの 実らない糠であつた。そして、永遠に救われない地獄じごくの鬼と

なつてしまった」

彼は自分で自分の頭を打つて、雪の中を転げ廻つた。そして、
「糠だ、糠だ！」と叫びながら、身体が痙攣ひきつるようにのた打ち廻つた。

「そうだ」と、そのうちにふと頭を擡もたげた。「そうだ、まだ晚おそくはない。これからすぐに駈けつけよう！ 吉良邸へ駈けつけて、まだ一党が引上げないうちであつたら、同士に詫びて、せめて公儀へ召しあげられる囚めしゆうど人の中へでも入れてもらおう！」

そう決心するとともに、彼は立ち上つてよろよろと駈けだしたが、一丁ばかり駈けだした時、またよろよろと雪の中に倒れてしまった。そして、もう二度とは立ち上らなかつた。

十三

明くる日は雪晴れのうらうらした日和ひよりであつた。その日一日じ
 ゆう、小平太はどこをどう歩いていたのか、人も知らず、おそら
 く自分でも分らなかつたに相違ない。とにかく、江戸の市中を、
 喰うものも喰わず、喪家そうかの狗いぬのように、雪溶けの泥でいねい凜ねいを蹴たて
 てうろつき廻つていた。そして、その暮方に、憔悴しょうすいしきつた
 顔をして、ぼんやり両国の橋の袂たもとへ出てきた。

見ると、橋の袂の広場に人ひと簇たかりがしている。怪しげな瓦かわらば
 版ばん売りが真中に立って、何やら大声に呶どな鳴つているのだ。――

「さあさあ、これは開かいびやく關かん以来の大仇討、昨夜本所松坂町吉良上野介様の邸やしきへ討入った浅野浪士の一党四十七人、主しゅうの仇あだの首級しるしを揚げて、今こんちよう朝あさ高輪の泉岳寺へ引上げたばかり、大評判の大仇討！ 忠義の侍四十七人の名前から年齢としまで、すっかり分つて、ただの三文！ ええ、大評判の大仇討、もうこれだけしかない、売れきれぬうちにお早く、お早く！」

「吉良……浅野浪士！……」という声が入った時、小平太は思わず足を留めた。そして、群集の頭越しに、喚よびうり売うりの男の顔をじつと穴の開くほど見詰めていたが、何と思つたか人込みを分けて、つかつかと前へ進み出で、

「おい呼売、一枚くれ！」と喚よんだ。

「へえありがとうございます、一枚！　もう後は五六枚しかありませんよ」

彼は手に掴つかんだ小銭を渡して、それを受取るなり、群集の眼を恐れるように、こそこそと薄暗い横丁へはいつて行つた。ひろげしてみると、なるほど大石内蔵助をはじめ寺坂吉右衛門に到るまで——中にはもちろん間違つたのもあるが——同志の名をずらりと並べて、この方々は、去年三月殿中において高家の筆頭吉良上野介に斫きりつけ、即日切腹、お家断絶となつた主君浅野内匠頭の泉下の妄もうしゆう執しを晴さんために、昨夜吉良邸に乗こんで、主君の仇上野介の首級しるしを揚げ、今朝泉岳寺へ引取つて、公儀の大命を待つている。お上ではただ今老中方御評議の真最中だと、事の概略あらまし

が載^のせてある。

「さては首尾よく仇を討たれたか……そして、予定のごとく泉岳寺へ……」

彼はその華^{はなばな}々々しい進^{しんたい}退^{たい}行^{こう}蔵^{ぞう}を目の当り見るような気がした。堀部安兵衛武^{たけつね}庸の名も出ている、横川勘平宗房の名も出ている。が、毛利小平太の名は？ もちろん、そこに出ていようはずはない。彼は義士たちの明るい功名を想いやるにつけて、いよいよ自分の眼の前が暗くなるような気がした。

「どうしよう、俺はどうしよう？」

こう呟きながら、彼は手を負った獣のように走りだした。が、どこへ行く宛もない。両国の橋を渡れば、もうじきそこが松坂町

の吉良邸である。彼はそこへ近づくことを一番恐れているくせに、やっぱりここへ来てしまった。が、今ごろそこへ行つて何になるう？

「ああ、俺はもうどこへも行く所がない！」

もちろん、彼にはまだおしおの家があつた。が、こうなつた上は、もうおしおにも逢われる身ではない。今ごろ顔を見せたら、あの女がどんなに落胆がっかりして、どんなに泣くことであろう！ 事によつたら、自分を軽蔑するあまり、物をも言わずに突き出してしまふかもしれない。

で、女にも逢われないとすれば、小平太はいつたいどこへ行くのだ？ 逢われぬ逢われぬと思ひながら、彼の足はやっぱり

柳島の方角へ向っていた。あれだけ近寄るのを恐れていた兩國の橋を渡ったのも、考えてみれば、やつぱりおしおに逢いたさの一念からであつた。

彼はいつの間にか妙見堂の裏手まで来ていた。雪明りに透^{すか}しておしおの家が眼にとまつた時、彼はぎくりとしたように足を駐^とめた。そして、ためらうように窓の明りを眺^{なが}めていたが、きゆうに足を旋^{めぐ}らして二歩三歩帰りかけた。が、すぐにまた踏みとどまつて、

「そうだ、これを最後に逢いに來たのだ。せめてよそながらでも顔を見て行こう」と呟^{つぶや}いた、そして、考えなおしたように、また女の家に近い行つた。が、すぐに戸口をいろいろとはしない

で、積った雪を踏んで裏手の方へ廻つてみた。おしおの家の裏手には長屋じゆうで使うようになってゐる釣瓶井戸があつた。小平太はそのそばに立つて、月影を避けるようにしながら、じつと家の中に耳をすました。が、家の中はしんとして物音一つしない。そのうちに、窓の障子しょうじに女の影が射して、それが消えたかと思うと、「ちーん！」と鈴りんの音が聞えてきた。

「そうだ、今日はおしおの母の三七日みなぬかだ！　仏壇にお灯ひでもあげているのだな」

が、おしおは下に坐つたまま、なかなか立ち上らない。小平太は窓のそばへ寄つて覗のぞいてみようかとも思ったが、長屋の者が水み汲ずくみにも出て、見つけられたらというような気がして、じつと

我慢して立っていた。が、たまらなくなつて、一歩ずつだんだん裏の戸口に近づいた。そして、そつと戸の隙間から覗いてみようとした時、不意におしおの立ち上る気はいがした。どうもこちらへ近づいてくるらしい。小平太は思わず一歩後へ退つたが、もう晩おそかつた。女は何の気もなくがらりと裏の戸を開けた。そして、思わぬ人の影に、「あつ！」と吃驚びっくりしたような声を上げた。それでも気丈な女だけに、手燭てしよくを上げて、おずおず相手の顔を見遣りながら、

「まあ、旦那様でしたか。こんな所に立っていらして、本当に吃驚びっくりしました！」と言いだした「いったいどうなすつたのでございますか?」

小平太は棒立ちになつたまま、返辞もしなければ、また動こうともしなかつた。

「今ごろお出でになろうとは存じませんので、一人で仏壇にお灯あ明かをあげていたところでした。さあ、どうぞこちらへおはいりくださいませ」

こう言いながら、おしおは先に立つて家の中へはいろいろとした。「はいつてもいいね?」と、小平太は始めて口を利きいた。

「まあ、何をおっしゃいますことやら、あなたのお家ではござりませぬか」と、おしおは手を取るようにして男を座敷へ上げた。それから行あんどん灯あんどんを持ちだして、小平太の前に手をつかえながら、あらためて挨拶あいさつをした。「もう二度とはお目に懸れぬようにお

つしやってでしたのに、今ごろお出で遊ばしたのは、ああ分った、お話しのごことはまたそろ日延べになったのでござりましようね？」小平太は苦しそうに、ただ「いいや」とばかり頭振りかぶを棹ふつてみせた。

「へえ？ 日延べにはならぬ。では、もう討入はすみましたかえ」と、おしおは思わず膝ひざを乗りだしてたずねた。

小平太はまた苦しげにうなずいてみせた。

「討入はすんだ！ それに今ごろここへお出でになったのは？」と、おしおはいよいよ合点がてんが行かなそうに、男を見返した。

「おしお、もう何にも言ってくれるな」と、小平太は相手の顔を見ぬように、目眩まぶしそうに眼を反そらしながら言った。「わしは、わ

しは討入うちいりの数に漏れたのだ！」

「ええッ！」と、おしおは思わず身をのけ反ぞらしたが、また気を取りなおしたように、男の前へ詰め寄りながら、「討入の数に漏れた……とおっしやるからには、やっぱりまだわたしに未練が残って……？」

小平太はやっぱり押黙ったまま俯向うつむいていた。

おしおは男の膝に取りついて、「わたしいわれに、大切だいじの場合にあなたに後れおくを取らしたとあつては……わたしは生きている瀬がない……あの時も早う死のうと思つたに、あなたのお言葉ほどに絆ほだされて、生き残つたがわしや口惜しい！ どうしよう、わしやどうしよう？」と、おろおろ泣きだしてしまった。

「いや、そうでない、そうでない！」と、小平太はさも苦しそうに顔面神経を引釣らせながら、ようよう口を切った。「この前来た時、お前に未練があつて死にきれないように言ったのは、ありやわしの嘘じゃ。わしはやつぱり自分の命が惜しかったのだ。命惜しさに、どうしても死ぬ覚悟ができなかつたのだ。おしお、堪忍してくれ、俺はこういうやくざな臆病者に生れついたのだ！」

おしおは思いも懸けぬ男の言葉に、ただもう訳も分らぬような顔をして、相手の顔を見返していた。

「ただ俺はこの臆病な心に打克つて、立派に死んでみせようと、どれだけ心を砕いたことか。お前を手に懸けようとしたのも、そなたに未練があるというよりは、せめてお前でも殺したら、もう

後へは退かれぬようになつて、未練なわしの心にもどうぞ死ぬ覚悟がつこうかと、それを恃たのみにあんな真似まねをしてみたのだ。が、生れついて臆病なわしには、さあ殺せと身体を突きつけられては、手も下せず、せめて大石殿に二人の仲を打明けて、こうこういう訳だと申しあげてしまつたら、その打明けたということが力になつて、義理にも後へは退かれまいと、またそれを恃たのみに歸つて行つた。が、明くる日大石殿に逢つてみると、大事を挙げる前日として、そんなつまらぬことを言いだす暇もなく、すぐすぐ戻つてきたのが破滅の原因もと、それからはいつそう心がぐらついて、昨日の夕方宿を出たきり、宛もなく町中まちなかをぶらついている間に、だんだん約束の刻限を切らして、大事の場合に間に合わず、わしはと

うとう世間へ顔の向けられない身となつてしまった。おしお、これを見てくれ、これを！」と言いながら、袂たもとからさつき両国の橋の袂たもとで買った瓦版かわらばんを取りだして渡した。

「そこにもあるように、わしを除いた四十七人は立派に上野介の首級を上げて、泉岳寺へ引上げ、お上のお仕置しおきを待つていられる。わしはその仲間を外れた。その仲間を外れたばかりでなく、人間の仲間からも外れてしまった！」

こう言つて、小平太は男泣きにしくしく泣きだしてしまった。

おしおは渡された紙片かみきれをひろげて、行灯の灯影に透して見たが、なるほど四十七人の名はあつても、小平太の名は出ていない。彼女はそれを手に持ったまま、そこに泣き崩くずれている小平太の姿

と見較べていたが、恥も見得も忘れて、心の底を曝けだした男の意気地なさに、ただもう胸が迫るばかりで、何とも言うことができない。恠こらえに恠こらえた涙が胸に痞つかえて、

「ひ、ひ、ひ——ッ！」と、これもその場に泣き伏してしまった。小平太はその泣声にむっくり顔を上げた。そして、しばらく女の打顫う胴体を見入っていたが、何と思つたか、

「おしお、さらばじゃ！」と言つたまま、すつくと立ち上つた。おしおも吃びっくり驚して顔を上げた。

「血相変えて、今ごろどこへ行きなさんす？」

「どこへという宛もない」と、小平太は立つたまましおしおとして言った。「わしはただ、よそながらでもお前の顔が見たさに、

恥を忍んでここまで来たばかりだ。わしはもうお前の良人と呼ばれる値打はない。お前もわしのようなもの縁を結んだのが因果いんがじやと諦あきらめてくれい。こうしてお前の顔を見たのをせめてもの慰めに、わしはただわしの行く所へ行くつもりだ！」

「まあまあ待つてくだされ」と、おしおは立つて小平太の袖そでに取り継がった。「お前がそのように言わんすのももつともじや。もつともじやが、わたしはわたしでまだ言うことがある。まあまあ下に坐いてくださんせいなあ」

言われるままに小平太はふたたびなよなよと下しもに坐った。おしおはその膝に取継つて、涙を持った眼に下からじつと男の顔を見上げながら、

「今お前は俺のようなものと縁を結んだのが因果じゃと言わんしたが、ほんに思えば、因果同志の寄合でござんすぞえ」と、しみりと言いだした。「どんな男でも良人に持てば、わたしはお前の女房じゃ。お前が卑怯なら、わたしも卑怯、お前が臆病者なら、わたしも臆病者でござんす。女一人で身は立てられぬ。たとい世間で笑われようが、どうしようが、わたしはどこまでもお前に随ついて行く……行きますわいなあ」

二人はいつかいつしよに固く手を取合っていた。

「わたしはそういう気じゃほどに、かならず短気な心を出したり、くよくよ 慥々してわずらわぬようにしてくださいませ。なに、お江戸ばかりに日は照りませぬ。もし世間の笑いものになって、ここで生き

て行かれぬというなら、唐天竺からてんじくの果までも、いつしよに行く気でおりますわいな」

「よう言うてくれた、よう言うてくれた！」

小平太は握にぎった女の手の甲の上に、はらはらと涙を落した。

「それでもまだ笑う者があつたら、是非ぜひがない、二人でいつしよに笑われましょう。どこまでも一人の男を守るのが女の道でござんすぞえ」

× × × ×

二人はなお夜を籠こめて語り明した。が、その夜のまだ明けきらぬうちに、二人手に手を取つて、日の光を恐れるもののように、いずくともなく姿を晦くらましてしまった。

青空文庫情報

底本：「日本文学全集」8 鈴木三重吉・森田草平集」集英社

1969（昭和44）年9月12日発行

入力：土屋隆

校正：浅原庸子

2006年10月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

四十八人目

森田草平

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>